



## 多様な個性や専門性を発揮できる“ゆるやかな”連携がいい

足立 己幸

地域で生活するひとりひとりの生活の質(Quality of life)と環境の質(Quality of Environment)のよりよい共生をめざす(願う)栄養・食教育を模索する我々にとって、“連携”や“ネットワーク”はまさにキーワードである。全国高らかに駆け巡る食育推進(計画)でも、誰とどのような連携やネットワークを取るかが議論され、より多くの人や組織と、より多彩で、より強力な連携やネットワークを取ることがよしとされ、その実現に向けて計画・実践が進められている。ややもすれば指導者や行政主導になり、個々人の事情や個性を後回しにするタイプに偏向する食育を心配してきた立場からすると、ありがたい流れだ。

しかし一方で、住民や生活者重視、公平や平等という理由を掲げて、より多くの人や組織とがっちり結び合うことが連携の理想の姿、とする意見も少なくない。何を活動のゴールにするかによって、連携に有効な人材や組織、その組み方も異なるであろう。そのゴールに向かって、各グループや組織が個性をつぶして仲良く進めるのではなく、各個性や実力を発揮し合って、時には意見や方法の矛盾を乗り越えて、より質の高い連携が求められるであろう。だから、誰の、何のための連携かが確認さ

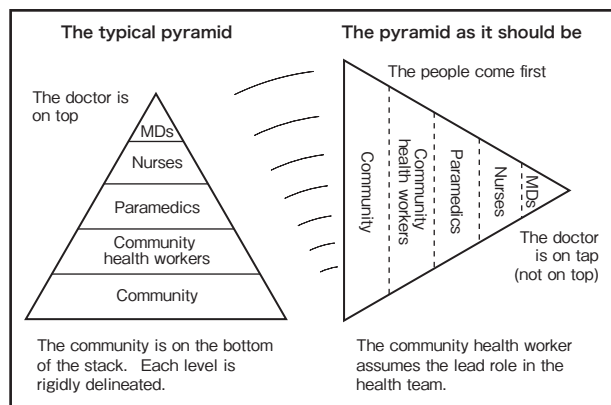
れずに、多くの人や組織が寄り合うだけでは、連携にあたらなと思う。

連携のあり様について考えるとき、目の前から離れない1枚の図がある。すでに、多くの場で紹介済みだが、David Morley 博士らの“My name is today”で紹介されている(図1)。旧来の医療中心、医師中心で、住民は身動きの取れない保健のしくみ(左)から、住民重視で専門家は(課題に対応して)各専門役割を発揮しつつ進める、新しい地域健康づくりへのパラダイムシフト(右)を提案している。私はロンドン大学客員教授時代に、著者のモレイ教授に、この大事な図にNutritionistが位置づいていないことで抗議したことがある。その後、国際学会等では「ミユキに叱られるので、ここに栄養関係者も入ります。今、健康づくりにとって栄養はベースですから……」と説明を加えるエピソードもある。この図のポイントは住民が第一であることと、課題に対応して関係者も、その関係性(連携)が異なってくること、だから各関係者の特徴的役割(個性や専門性)がより重要であること、である。

現実には、食育推進計画等の連携の図に、各組織等が線でしっかり結ばれているものが多い。食育のゴールはそれぞれであり、その実現のためのアプローチを多様に展開するべきだと本文中に書かれていても、線でしっかり結ばれている。「私たちのグループは専門家でないから、この立派な連携の図には入らない」と連携の輪に入ることを拒んだ市民グループがあったほどだ。

ゆるやかな連携を図にして、使っていこうという願いが少しずつ具体化している。私が策定委員長をさせていただいた神奈川県鎌倉市の食育推進計画がその一つ(図2)。第55回日本栄養改善学会総会シンポジウムIV「食育のこれからを考える」で報告したとおり、鎌倉市の計画策定のコンセプトは以下のとおりであった。

図1 The pyramid on its side



David Morey and Hermione Lovel  
My Name is Today P.22 Macmillan Publishers(1986)

①住民主体・住民参加を育てる。②地域の食を食関連諸活動の寄せ合わせだけでなく、これらの関連性や循環性を重視する「食」としてとらえる。③地域で、歴史的に育まれた人的資源や社会資源“鎌倉らしさ”のフル活用。④③を受け身で活用するだけでなく、より望ましい環境づくりへ貢献したい。可能なら住民の生活の質(QOL)と環境の質(QOE)のよりよい“共生”をめざす。食育をチャンスに新しい切り口で、市全体のより高い将来像構築へも貢献したい。⑤日常的に訪れる観光客を市民の輪に入れていただくイメージで、鎌倉の食育を他の地域へ、国外へも発信・共有したい。これらの実現のために、⑥国や県の食育推進計画に十分に学びつつも、住民と直接向き合っている、大きすぎないサイズの市行政の特徴を活かす「食」育の枠組みを構築する。⑦全市民や関係者が共有できる食・食育のゴールや、ネットワークの俯瞰的な“イメージを育てる”ことを重視する、等。

そして、この実現のための具体策が、鎌倉らしさの一つである“多様な活動グループが育っている”ことを重要な社会資源と位置づけ、各グループの固有の活動を優先し、かつ食育活動が結果として、その質の向上に貢献できるように考えたことである。したがって、食育推進のネットワーク図は従来の食関連組織に張り付けるの

でなく、課題に対応した新しいグループをその都度柔軟に、ゆるやかに形成するイメージとした。

しかし、公表前に、一部の関係者から「連携の図に線が引いてないのは未完成だ」とクレームが付き、急きよ縦横無尽に線が加筆された。その結果を見て策定の議論に真剣に取り組んできた一部の委員や事務局関係者が「線を固定的に書かないことに特徴があるのだから、前の案に戻すべきだ」と発言して、原案に戻って“ゆるやかな連携の図”(図2)が公表された経緯がある。

もう一つは紙面の都合で図を紹介できないが、愛知県清須市の食育推進計画の「食育推進の体制」の図である。

- 市民の一人ひとり(子どもから高齢者まで、障害を持っている人も)がそれぞれに自分を発揮し、楽しく参加できる。
- 専門家や行政はそれを支えるサポーター
- 食や健康だけを考えるのではなく、それぞれの生きがい・生活の質を高め、住みやすい、活発なまち(市)づくりをめざす。
- 歴史を大事にし、“清須市らしさ”のフル活用をめざして、市民が一人残らず食育の輪に関わっていけるように、市の花であるチューリップの花びらに、食に関わるグループや組織の名前を思いついただけたくさん載せていった。

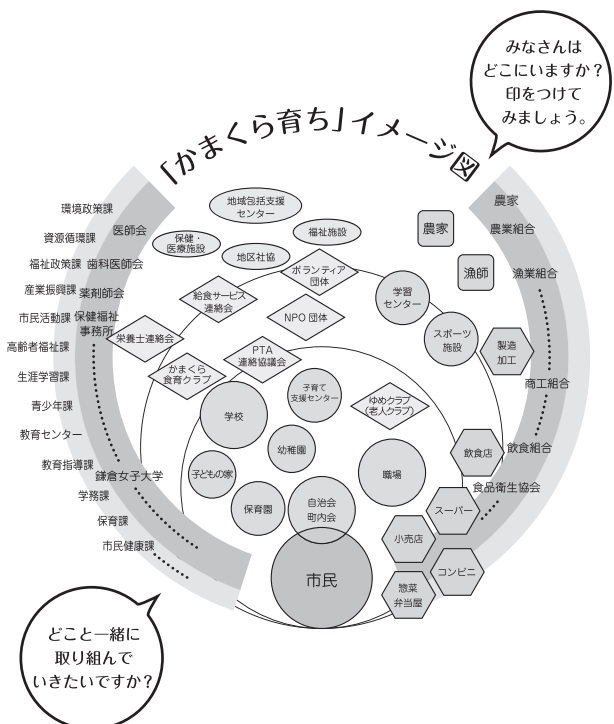
それぞれのグループや組織の元々の主旨やコンセプトをしっかりとって、個性を活かした行動や活動ができるようにと、委員がこの図を使って仲間たちに“ゆるやか”な連携で、自分たちのグループの本来の活動にもプラスになるようにと新しい勧誘が始まったと知らせがあった。

「どんな連携の図を描くのか」そのために地域の人々、社会資源や人的資源をフル活用できる、展望ある“ゆるやか”論が必要であろう。第2号はその議論のきっかけや、高まりのたたき台になることを願う。

### 著者略歴

名古屋学芸大学大学院教授。女子栄養大学名誉教授。専門は、食生態学、食教育学、国際栄養学。保健学博士、管理栄養士。子どもの「一人食べ」問題などに長年取組み、食育セミナーを20年以上実施している。食にかかわる専門家を支えるNPO法人 食生態学実践フォーラムを設立。理事長に就任。

図2 鎌倉市の食育食育推進計画





田中 久子、石川 みどり、足立 己幸

「食生態学—実践と研究」は、多くの食の専門家が集い、意見を交換し合う“フォーラム”です。そこで、意見交換の種となる食生態学の視点に実践的研究論文を提示し、まずは論文の著者から、次いで、実践・教育・研究の各視点から、この論文をどのように読み、活用するかについての意見を出していただきました。また、NPO法人 食生態学実践フォーラム会員の方々からの声を「誌上フォーラム」として記載しました。

今回の論文「食育ネットワーク形成における参加グループの課題共有のプロセス」は、「日本公衆衛生雑誌」第55巻 第3号(147-155)に掲載されたものです。

## 食育ネットワーク形成における参加グループの課題共有のプロセス 「S食育ネット」の事例

田中 久子<sup>\*、2\*</sup> / 石川 みどり<sup>3\*</sup> / 足立 己幸<sup>4\*</sup>

**目的** ネットワーク形成における課題共有のプロセスを検討し、そこで組織コミットメントがどのように形成されるかを確認する。

**方法1.** 食育ネットワーク形成のプロセス:保健所管内行政栄養担当者の話し合い、J大学教員との検討後、食の特徴をふまえた課題共有ができるよう“A:主に食情報の提供を行うグループ”、“B:主に食物の提供を行うグループ”、“C:AB両方の活動を行うグループ”の参加を促し、ABC同士が接点をもてる場を設定した。具体的には地域への公開活動を2回、有志による活動が8回行われた。第1回目の地域への公開活動で、食育で育てたい力について確認し、有志による活動で、課題の整理・分類を基にした組織間連携の可能性を検討し、その成果をフィードバックするかたちで第2回目の公開活動でワークショップを行った。

2. 問題共有のプロセスの分析:2003年から2006年までの一連の食育ネットワーク形成にかかわった組織、活動プロセス、内容、参加者の作業、発言を著者が記録した。記録内容を課題別に分類し、類似するものをまとめ特徴的な内容にタイトルをつけて系時的に位置づけ、プロセスを確認した。さらに、結果を基にして、食育ネットワーク形成の全プロセスに携わった参加者自身による振り返りで態度の変化を考察した。

**結果1.** 地域への公開活動には34団体63人が参加した。地域の食の課題には、多様なライフスタイルの中で食生活が揺らいでいる、食知識・体験の不足により、つくる・食べる・伝承する行動に問題がある、情報が氾濫しているがその調整がないことが示された。また、食の課題に対して参加組織各々が異なる活動をしていること、さらに、活動の不十分さや不得意さを認識でき、連携の可能性が確認された。

2. 問題共有のプロセスは3段階であった。地域の食の課題の確認、食の課題をめぐるグループ活動の個性の明確化、各グループ同士の連携の可能性である。ネットワーク形成の全プロセスに参加した3人の態度を分析した結果、他の組織活動への関心、他の組織との共感があげられた。

**考察** 課題共有をすすめた活動には、初期段階から食の特徴をふまえた課題の共有ができるように支援したこと、課題の特定、課題の分析、活動の選択という流れを一度行った後に、成果の確認およびフィードバックする形で地域への公開活動での検討を重ねることが、参加者同士の信頼を生み、かつ、参加者個人の態度変容が促されるのではないかと考えられた。

**Key words:**食育、ネットワーク、課題共有、コミットメント

\* 女子栄養大学栄養学部

2 \* 元埼玉県入間西福祉保健総合センター

3 \* 名寄市立大学保健福祉学部

4 \* 名古屋学芸大学大学院

連絡先: 〒350-0288 埼玉県坂戸市千代田3-9-21

女子栄養大学公衆栄養学研究室 田中久子

## I. 緒言

2002年に、次世代育成支援対策市町村行動計画に「食育の推進」が必要事項として掲げられ食育の重要性が強調されるとともに連携体制も整いつつある。2005年の食育基本法施行に伴いこの動きは加速され 国から市町村レベルまでの行政、関係組織・機関・団体、民間企業、NPO等(以下、「組織」という。)の食育に関する連携・ネットワークが立ち上がっている。

ネットワークは、地域の食育推進の主要項目としてあげられ<sup>1)</sup>、とくにコミュニティレベルのネットワークがあるかが食育の効果に影響を与える<sup>2)</sup>とされる。ネットワークとは、意見、情報、資源を共有できる地域のコミュニケーションを構築する上での重要な要素で、人々やカテゴリーの結びつきを創造するつながりであり、需要が大きくなってでもできる活動である<sup>3)</sup>。

先行研究では、ネットワークができたことにより住民の健診受診行動が増加した<sup>4)</sup>、高齢者の口腔状態の身体機能が改善された<sup>5,6)</sup>の報告がある。また、ネットワーク形成のきっかけとして一機関・一職種だけの対応では課題解決が難しく関係機関が協力した支援の必要性が認識された<sup>7,8)</sup>、関係者で課題共有を行ったことによりネットワークの重要性を認識した<sup>5)</sup>ときに成立したと明記されているが、このプロセスそのものにふれられてはいない。しかし、ネットワーク形成の強力な要素の一つとして課題共有があげられ<sup>9)</sup>、課題を共有することにより行政、専門家、地域活動組織が協働して課題を解決するための組織コミットメントが長期的に形成され<sup>10,11)</sup>、同時に組織に属する個人の態度変容が促される<sup>12)</sup>ことが報告されている。

一方、食の課題の特徴としては、食物の生産・輸入・加工・流通・消費の循環の過程で“食物へのアクセス”に関する課題と、食物に付加価値をつけ消費者の選択行動に影響する“食情報へのアクセス”に関する課題があるが、これらは別立てに検討されるべきものではなく、両面を総合した整備をすすめることが重要である<sup>13,14)</sup>。そのため、これらを解決するためには、食物へのアクセスと食情報へのアクセスの両面に関係する組織が参加することが重要である。この多様な組織等が参加できるネットワークを形成するには、初期段階で各組織の活動内容の特徴を明確化し、分類を行うことにより、交換される情報の信頼性を確保することができる<sup>3)</sup>。著者らはこれまで地域の食の課題の特徴を明確にするために、食物へのアクセスに関する課題と食情報に関する課題の分類、あるいは国レベル・地域レベル・個人レベルの位置づけを行うことが課題解決の方法をみつけることに有効であることを研究や実践で確認してきた<sup>15~17)</sup>。

そのような背景のなか、埼玉県S保健所管内(以下「S地域」という。)に、地域の人々の食をめぐる課題を改善するために、役立つ情報交換等をよりスムーズに行えるネットワークがほしいという声がかかるようになった。

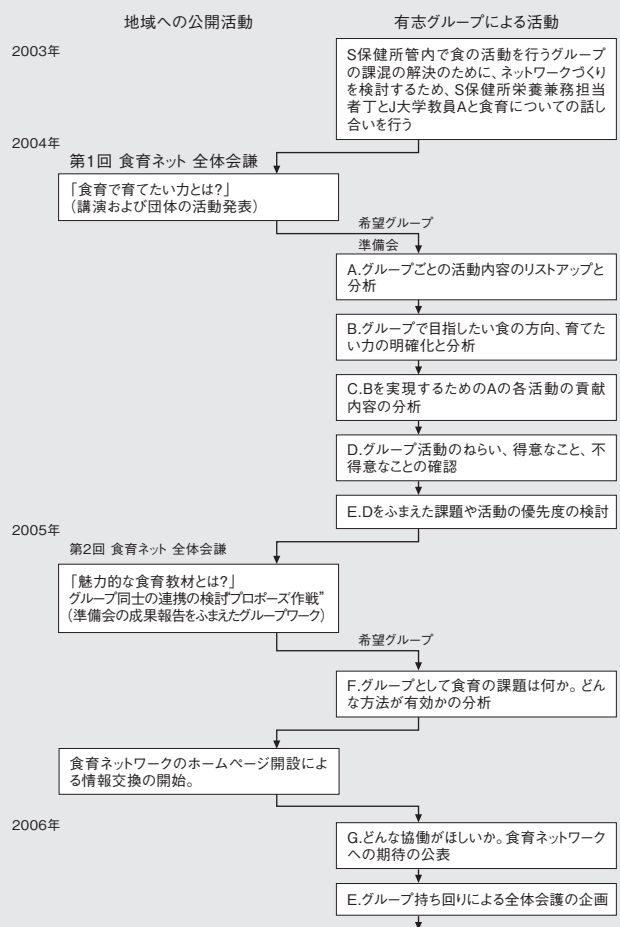
このような状況の中でS地域は、課題共有の場を提供することによ

る課題解決のきっかけづくりとして、食育ネットワーク形成を試みる機会をえた(形成されたネットワークを「S食育ネット」と参加者が名づけた。以下「S食育ネット」という。)。そこで、これらの形成における参加グループの課題共有のプロセスを明らかにし、かつ、そのプロセスを含めて個人の組織に対する態度の概念の1つとして多く使われている組織コミットメントに注目し、これがどのように形成されるかを確認した。なお、組織コミットメントは、組織に対する態度の概念の1つであるが、本研究で用いる組織コミットメントとは、組織に所属する個人の組織に対する情緒的な側面を強調している特定の組織に対する同一化と関与の概念<sup>18)</sup>とした。加えてこれらを構成する要素<sup>18)</sup>としては①組織の目標や価値に対する信頼と②組織のために努力しようとする意欲、③組織の一員として留まりたいとする願望が揚げられている。

## II. 目的

「S食育ネット」を事例にして、ネットワーク形成における課題共有のプロセスを検討し、そこで組織コミットメントがどのように形成されるかを確認する。

図1 S食育ネットワーク形成における課題共有のプロセス



### Ⅲ. 方法

#### 1. 「S食育ネット」形成のプロセス

S地域の保健、福祉、教育の行政栄養担当者間の話し合い、および保健所栄養業務担当者Tと保健所管内J大学A教員と食育についての話し合いの後、日常業務で既に把握されている医療・保健・福祉・教育等、地域の食に関わる組織に加えて、これらに関する市民団体や農林・産業商業等の組織・団体・NPO等を新たに把握した。把握するにあたっては、人間と食環境とのかかわりの視点を取り入れた食生態学の枠組み<sup>13)</sup>(以下「枠組み」という。)を活用した。この経過において、すでに参加していたメンバーから他に声をかけていったことで全体会議での参加グループの幅が広がっていった。また、有志によるワーキンググループ(以下「有志G」という。)ができ、「枠組み」<sup>13)</sup>を視野に入れ整理していく中で、次のようなグループに分類された。

“A:主に食情報の提供を行うグループ”、“B:主に食物の提供を行うグループ”、“C:AB両方の活動を行うグループ”<sup>19-20)</sup>である。そしてA、B、Cそれぞれのグループがネットワーク形成に参加できるよう配慮した。保健所はAに属する一組織として位置づいた。その後、S地域への公開活動が2回、有志による公開活動に向けての活動が8回行われた。1回目の公開活動では「食育で育てたい力とは?」の講演をA教員が行った。この場でネットワーク立ち上げへの呼びかけに応じた有志Gによる活動を5回行った。1回目の活動で把握された課題内容を基に、KJ法<sup>21)</sup>を応用したブレンストーミングを行った。一枚のカードに栄養・食生活の課題を一つ書くという条件で、430枚の課題が集められた。それらをS地域の1食の課題、2地域にある組織等による食に関わる活動内容について、再度枠組み<sup>13)</sup>を用いて分析・分類し、「S地域」の食をめく小る課題を明らかにした。その成果をふまえ、2回目のS地域へ公開した活動を行い、問題の確認と改善の必要性、改善のための連携の必要性について検討するワークショップが行われた。ワークショップでは、連携したい相手を確認するためのワークシートを作成した。これを用いて食育で育てたいこととこれまで

図2 プロポーズ作戦のためのワークシート

ワークシート

私たち  は、

のために

の活動してきました(又はしたいと考えています)。  
この活動を高めていくために、

が必要なので

に活動のパートナーになってほしいと願います。

a:グループ等の名称 b:食育で育てたいこと c:重要視していることや得意なこと  
d:必要なうまく進まないことや不得意なこと e:プロポーズするグループや個人の名前

重視していることや得意なこと、必要なうまく進まないことや不得意なこと、それを解決するために連携したい個人や組織の名称をあげる「プロポーズ作戦」と名づけた発表を行った。その後、参加グループからS食育ネットのホームページ開設による情報交換が提案され、有志Gによる準備会ができ、S地域への公開に至った。ホームページの表紙やコンテンツ、情報発信内容についても各自が案を持参した。コンテンツ決定後は内容分担者を決定した。

#### 2. 問題共有のプロセスの分析

2003年5月から2006年3月までの一連の食育ネットワーク形成にかかわった組織、活動プロセス、内容、参加者の作業、発言を著者が記録した。主な内容は、参加者名簿、参加した各組織のホームページ情報や活動状況記録、会議等の記録、カード法により記述された項目、参加者の感想記録、会議事前意見メモ、映像等であり、記録内容を課題で分類し系時的に位置づけた。その後、枠組みを用い、さらに類似するものをまとめ、特徴的な活動内容にタイトルをつけ、2003年から2006年までのプロセスを整理した。

その結果を基にして、食育ネットワーク形成の全プロセスに参加した者の態度の変化を、参加者自身の振り返りによる記述で確認した。

なお、これら全ての活動は、活動の予算化、「S地域」への公開活動や「有志G」による活動、助成研究報告会時に参加グループの口頭による同意を経て行われ、かつ、有志Gを中心とした参加者によって、「食育に関する研究助成の発表会」の場で報告された。

### Ⅳ. 結果

#### 1. 全体会議の参加者の特徴

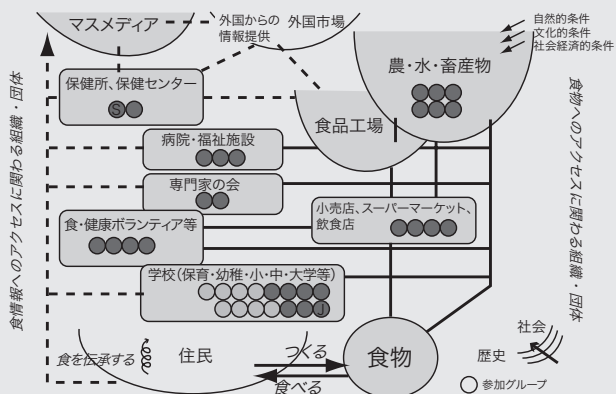
全体会議参加組織および団体は34団体63人、「有志G」では15団体23人であった。

参加グループには、A主に食情報の提供を行うグループとして健康ボランティアグループ、障害児老ボランティアグループ、学童保育所、歯科衛生士の会、大学、行政機関(保健、福祉、農林等)があがった。B主に食物の提供を行うグループとして食事サービスの会、飲食店、農業協同組合等、AB両方を平行して行うグループには保育園、小学校、障害児施設、病院、ふれあいサロン、フリーで活動している栄養士の会、食生活改善推進員協議会があった。

#### 2. 「S地域」の食の課題

食の課題については、次のようなことが上げられた。枠組み<sup>13)</sup>の視点を取り入れた評価枠組みを用いて分析・分摸した結果、「S地域」の食の課題には、①多様なライフスタイルの中で食生活が揺らいでいる、②食知識・体験の不足により、食物をつくる・食べる・伝承する行動に問題がある、③情報が氾濫しているがその調整がない、という各側面に問題があることを参加者が認識した。

図3 参加グループの特徴



出典) 足立己幸:食生活と環境とのかわり、食生活論、p121、医歯薬出版、2005を一部、加筆、修正

### 3.「S地域」の食の課題を解決するための活動と方策

「S地域」の食の課題をふまえ、それを解決するために必要な方策として、「有志G」による活動の結果、①ライフスタイルを見直し・健康に暮らすために食の重要性を学ぶことができる場をつくる、②食の知識や体験から食を学ぶ機会をふやす、③正しい情報を発信することがあった。そこで地域での公開活動では、ABCのグループ毎に組織が実際に行っている活動を書き出した結果、123の内容にあたる活動が多数行われていること、その多数の活動において類似する活動は少なく、全組織が異なる内容・方法で活動を行っていることが確認された。

### 4.グループ同士の連携の可能性

プロポーザ作戦の結果、全グループ共にうまくすまないことや不得意なことがあり、連携の可能性が確認され異分野グループへのプロポーザがあがった。

### 5.課題共有のプロセスにおける組織コミットメントの形成

2003年から2006年までに組織コミットメントの形成として以下の3段階が確認された。①地域の食の課題の確認、②食の課題をめく小るグループ活動の個性の明確化、③各グループ同士の連携の可能性である。その3段階をふまえて、食育ネットワーク形成の全プロセスに参加した者A氏、O氏、M氏の振り返りによる記述からその態度をみた結果、地域の食の課題の確認時には他グループ活動への関心や課題に対する同一認識、連携の可能性の検討時には他グループとの共感や連携への意欲があげられた。

## V. 考察

2003年当時、「S地域」では二次医療圏版地域保健医療計画の重点施策(11柱)の1柱に、食・栄養に関する施策が掲げられ 保健医療に関する関係機関や団体と連携をとり、その施策を進めていくこととしていた。また、県の新規事業に食育連絡会議があった。

S保健所の栄養業務担当者は、これらの具体化を進めるため、かつ、トップダウンではないネットワーク構築の方法を検討するためJ大学A教員に相談した。その結果、食の特徴である生産から流通、消費までの関係者を含めたネットワークの重要性と、食物へのアクセスと食情

表1 S地域の食の課題

大項目	小項目	食の課題	参加グループで合意した課題
全体			
	食物をつくる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食物の成長過程がわからない。</li> <li>・コンビニを多く利用する。</li> <li>・食品の選び方がわからない。</li> <li>・手作りの良さを知らない。</li> <li>・食事をつくらない家庭(男女共)が多くなった。</li> <li>・バランスのよい食事を管理できない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①多様なライフスタイルの中で食生活が揺らいでいる。</li> <li>②食知識・体験の不足により、つくる・食べる・伝承する行動に問題がある</li> <li>③情報が氾濫しているがその調整がない。</li> </ul>
人間	食べる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・偏食がある。</li> <li>・食事時間が確保できない。</li> </ul>	
	伝承する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族一緒に食事を楽しむことを知らない。</li> <li>・核家族で祖父母から伝統的な知恵を学ぶことができない。</li> </ul>	
	食知識 食態度	<ul style="list-style-type: none"> <li>・料理の種類を知らない。</li> <li>・食自体に関心のない人がいる。</li> </ul>	
食物	栄養素 食材料料理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・栄養バランスが悪い。</li> <li>・伝統料理が少ない。</li> </ul>	
	周囲の人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもへのしつけが十分でない。</li> <li>・周囲の教育の場が少ない。</li> </ul>	
食環境	食物へのアクセス 情報へのアクセス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地元の生産情報につかめない。</li> <li>・情報が氾濫しているがその調整がない。</li> <li>・活動の評価方法がわからない。</li> </ul>	



表2 S地域の食の課題を解決するための活動と方策

(1)有志グループによる活動	食の課題	①多様なライフスタイルの中で食生活が揺らいでいる。	②食知識・体験の不足により、つくる・食べる・伝承する行動に問題がある	③情報へのアクセスは情報の氾濫しているがその調整がない。
検討した結果を基に提案した食の課題と方策	方策	・ライフスタイルを見直し健康に暮らすために食の重要性を学ぶことができる場をつくる。	・食の知識や体験から食を学ぶ機会をふやす。	・正しい情報を発信する。
(2)地域への公開活動	健康ボランティアグループ	◎目標・計画の決定とその結果の市町への報告 ◎実践したい食習慣の取り組みの場の提供	○シンポジウム開催 ○問題改善に貢献できるキラッと輝く人の紹介 ○料理レシピの募集	
(1)の提案を受けて各グループで共有した活動状況	フリーで活動している栄養士の会	○地域に情報発信	◎幼稚園で親子クッキング	○
A:主に食情報の提供を行うグループ	歯科衛生士の会		○	○
	生涯学習NPO	◎		◎
	市町村保健センター	◎ヘルスアップセミナー ◎はつらつクッキング ◎子育て講座	◎ライフステージに応じた内容で実施 (主に調理実習) ◎はつらつクッキング ◎ババママ教室 ◎離乳食講習会 ◎子育て講座	○多様な地域住民への情報発信 ◎各種健康教室
B:主に食物の提供を行うグループ	農業協同組合	△農業生産の振興にかかわる内容であれば協力	○農業者への食育 ◎学校の農業体験の援助	
	保育園	○職員への食育	○父兄会を活用した食育	○給食だよりの発行
C:A.B両方の活動を行うグループ	高齢者施設	○	◎	○
	食生活改善推進員協議会	◎	◎初めてクッキング ◎子育て講座での調理指導 ◎はつらつクッキングでの調理指導	◎30代健診でのチラシ配布 ◎自己学習会

◎:すでに実施している ○:今後実施したい △:実施したいが難しい

表3 グループ同士の連携の可能性

a:グループの名称	b:食育で育てたいこと	c:これまで重視していることや得意なこと	d:必要なのにうまく進まないことや不得意なこと	e:プロポーズする個人や名称
歯科衛生士の会	子どもが良く噛んで食べる	噛む噛む健康づくり、歯科保健	活動の場、給食時間、給食内容の見直し	学校給食の関係(教員、栄養士)
A:主に食情報の提供を行うグループ	生涯学習NPOで働く人	子どもから高齢者までが心身ともに健康に生きる	お昼をつくって食べる会	地域で活動する場、協働する力
	市町村保健センターで働く人	子どもから大人までが好き嫌いや偏食をなくす	様々な食体験をしてもらうための農業体験、栄養相談、栄養指導など	世代、性別に関らず、食の大切さ
B:主に食物の提供を行うグループ	農産物の生産、供給を担う人	消費者の方々が安全、新鮮な農産物の供給を目指してもらう	安全、安心な農産物の品質、規格等について理解を求める	多くの方に農業生産現場を理解してもらう
	幼稚園、保育所で働く人	食に対する意識の薄い親が意識をもつ	試食会、給食だより、面談をする	幼稚園、保育園の横の連携
	小学校や学童保育などでいつも子どもと一緒にいる人	子どもが日本の正しい食文化や食習慣を身につける	学校給食、学童保育、授業	地域の食にかかわる方との連携
C:A.B両方の活動を行うグループ	病院、福祉施設等で働く人	健康を維持したい方が正しい情報を提供する	自分たちの働いている施設や店で少しずつ指導、伝達	良い情報提供できる内容、会場(施設)、人員の充実
	フリーで活動している栄養士の会	地域住民が栄養改善(食育)推進、地域活性化する	栄養指導、料理講習会	より技術、その専門的知識(安全、環境、衛生関係)の向上
	食生活改善推進員	子どもから高齢者までが正しい食文化、食習慣を知る	地域に密着した児童館ならびに公民館を活用した活動	正しい、新しい情報収集



表4 課題共有のプロセスにおける組織コミットメントの形成

時 期	組織コミットメントの形成	課題共有のプロセス		
		A氏 (Aグループ)	M氏 (Bグループ)	O氏 (Cグループ)
2004年3月	①地域の食の課題の確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連携という考え方が嬉しかった。</li> <li>・食の課題について参加者同士の違いはなかったが、分類するときに意見が合わず、合意に時間がかかった。</li> <li>・誰もが参加しやすいゆるやかなネットワークがよいと思った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんなグループがネットワークに興味をもっているのか知りたかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どのような方がどのような活動しているのかが興味深かった。</li> <li>・各々の立場によって考え方や意識の違いがあると思う。</li> </ul>
2004年10月	②多食の課題をめぐるグループ活動の個性の明確化	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連携の可能性を実感できた。</li> <li>・ホームページのたたき台案を他のグループが作ってくれたので作業がスムーズにいったと思う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループにより得意分野の活動があることがわかった。</li> </ul>	
2005年4月	①と②をふまえた連携の可能性の検討	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホームページの具体化につれて連携したいグループ同士の情報交換がやりやすくなると感じた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・連携に直接役立つような具体的提案を発言するグループが出てきたので嬉しかった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネットワークができることで協力ができれば心強い。</li> </ul>

( ) : A:主に食情報の提供を行うグループ B:主に食物の提供を行うグループ C:A・B両方の活動を行うグループ

報へのアクセスの両方をカバーできる関係者等との連携が必要である<sup>1, 21)</sup>が、保健所活動では、保健医療分野以外の活動との接点は小さかったことが確認された。実際、保健医療福祉関係部署や団体とのネットワークは、健康増進法における給食施設指導や食品栄養成分表示に関する業務、市町村支援等の栄養業務を通じてある程度つくられてはいたが、それ以外の部署や関係組織等と連携した活動はほとんど行われていなかった。

保健医療分野における食育が充実するためには、これまで接点の少なかった組織とのネットワーク化が必要である<sup>17)</sup>ことが考えられた。そこで、最初の出会いの場を設定するために、大学教員を活用した地域への公開活動「食育で育てたい力とは?」の講演を計画し実施した。そこに参加した組織を、A:主に食情報の提供を行うグループ”、”B:主に食物の提供を行うグループ”、”C:AB両方の活動を行うグループ”と位置づけ、ABC全ての組織が関わるということをネットワークの特徴にして活動を進めた。全体会議ではテーマにより参加するABCグループ数の割合は異なっていた。しかし、一度は欠席したグループでも関心のある内容のときは参加していた。活動の長期的維持にはゆるやかなネットワークが重要<sup>23)</sup>であるが、食の特徴をふまえたネットワークにおいては、生産から消費の循環とABCの各グループのような多様な組織の参加が、多様課題の検討につながり、それが無理のない参加を促し、ゆるやかなネットワークにつながるのではないかと考えられた。

一方、課題共有のプロセスにおける組織コミットメントの形成には、地域の食の課題の確認、食の課題をめぐるグループ活動の個性の明確化、各グループ同士の連携の可能性があったことが確認された。ま

た、組織コミットメントの構成要素である1対の目標や価値に対する信頼と2組織のために努めようとする意欲<sup>18)</sup>が発言にみられた。ネットワーク構築には、パートナーとしての信頼を維持する個人的な人間関係が重要である<sup>3, 24)</sup>とされる。この課題を共有するプロセスも、組織のみでなく参加者個々人の人間関係を築くことにつながる事が考えられた。そこには、有志による課題の特定や分析、活動の選択という流れを一度行った後に、その成果の確認<sup>9)</sup>およびフィードバックする形で地域への公開活動での検討<sup>25, 26)</sup>が重ねられたことが、参加者同士の信頼を生み好ましい人間関係を築くことにつながり、かつ、参加者個人の態度変容が促されるのではないかと考えられた。

本事業は、農山漁村文化協会による食育実証研究助成“大学を拠点とし、地域性を重視した食育推進コラボレーションシステムの構築”および“埼玉県 平成17年度みんなであつくる食の安全安心推進事業”として実施された一部である。

( 受付 2006.10.20  
採用 2008.1.4 )

## 文献

- 1) 足立己幸, 衛藤久美. 食育に期待されること. 栄養学雑誌2005; 63(4):201-212.
- 2) Gregson J, Forester SB, Orr R, et al. System, environmental and policy changes: Using the social-ecological model as a framework for evaluating nutrition education and social marketing programs with low-income audiences. *Journal of Nutrition Education*, 2001;33:S4-S15.
- 3) Owen AL, Splett PL, Owen GM. Interorganizational implementation. In: Frankele RT, Owen AL, eds. *Nutrition in the Community*. Joint ventures. WCB/McGraw-Hill, 1993:433-436
- 4) 三嘴 雄, 岸 玲子, 江口照子, 他. ソーシャルサポートネットワークと在宅高齢者の検診受診行動の関連性 社会的背景の異なる三地域の比較. *日本公衛誌*2006;53(2):92-103.
- 5) 藤中高子, 戸床しおり, 福本久美子. 要介護高齢者のための口腔ケアネットワークの構築 歯科に関する保健・医療・福祉の連携. *日本公衛誌*2006;53(4):277-284.
- 6) 岸 玲子, 堀川尚子. 高齢者の早期死亡ならびに身体機能に及ぼす社会的サポートネットワークの役割. *日本公衛誌*2005;51(2):79-93.
- 7) 相馬幸子, 明間幸子, 佐野美智子, 他. さまざまな職種からなるネットワークの構築, 新津市子ども虐待予防ネットワーク委員会の取り組み. *保健師ジャーナル*2004;60(10):954-958.
- 8) 柴川ゆかり, 梅村和歌子. 学校保健と地域保健の連携による思春期教育の取り組み一年間を通したエイズ啓発事業から連携のプロセスを中心に. *思春期学* 2002;20(3):322-331.
- 9) 山田和子. 各事例から見たネットワーク構築・運営のポイント. *保健師ジャーナル*2004;60(10):972-975.
- 10) Boyle MA, Holben DH. Building coalitions. In: Boyle MA, Holben DH. *Community Nutrition Action, an Entrepreneurial Approach*. CA: Thomson Higher Education, 2005:227.
- 11) 倉谷尚孝, 城戸康彰. 行政組織における組織コミットメント—組織コミットメントの先行要因と結果要因の実証研究. *産能大学紀要* 2006;26(2):55-71.
- 12) Peter H, Shanker S, Klassen AC, et al. A problemsolving approach to nutrition education and counseling. *Journal of Nutrition, Education and Behaviors*. 2006;38(4):254-258.
- 13) 足立己幸. 人間と食生活のかかわり. In: *食生活論*. 東京: 医歯薬出版, 2003:121.
- 14) 健康づくりのための食環境整備に関する検討会・健康づくりのための食環境整備に関する検討会報告書・厚生労働省生活習慣病対策室, 2004:11.
- 15) 石川みどり, 足立己幸. コミュニティを重視した研修方法の検討: ネパール王国栄養専門家カウンターパート研修の事例. *日本国際保健医療学会誌*2006;21(2):141-149.
- 16) 田中久子. 栄養活動から見た地域保健福祉活動の企画・評価に関する研究. 平成11年度厚生科学研究補助金(健康科学総合研究事業)報告書2000:1-7.
- 17) 足立己幸, 田中久子. 管理栄養士の専門性を生かした公衆衛生専門職への期待. *保健の科学* 2007;49(4):247-253.
- 18) Mowday RT, Steers RM, Porter LW. The measurement of organizational commitment. *Journal of Vocational Behavior*, 1979;14(2):224-247.
- 19) 足立己幸. セルフケア参加を重視する健康教育からみた栄養・食行動の特徴. *日本健康教育学会誌*2000;7:1-2.
- 20) Krifik L. Consumer citizenship: acting to minimize environmental health risks related to the food system. *Appetite* 2006;46(3):270-279.
- 21) 川喜田二郎. 続・発想法, KJ法の展開と応用. 東京: 中央公論社, 1970
- 22) 村山伸子. コミュニティ・ニュートリション—エソパワメントをととした健康な人間・社会・自然のエコシステムの創造への挑戦—. *栄養学雑誌*2003;61(2):79-91.
- 23) 貴成文彦. 保健と医療と福祉の「連携」の推進要田に関する検討—地域での連携推進にむけて. 平成10年度厚生科学研究費補助金(健康科学総合研究事業)「保健行政サービスにおける医療・福祉との連携方策に関する実証的研究」報告書(主任研究者 武田則昭), 1999.
- 24) 石川みどり, 足立己幸. 栄養教育へのジェンダー視点導入の有効性—パナマ共和国ノベ族農村女性の事例—. *日本健康教育学会誌*2003;11(2):51-66.
- 25) 中村正和. 行動科学に基づいた健康支援. *栄養学雑誌*2002;60(5):213-222.
- 26) 宮坂忠夫. 健康教育の企画, 実施と評価. In: 宮坂忠夫, 川田智恵子, 吉田 亨, 編. *健康教育論*. 東京: メジカルフレンド社, 2004:157-171.

## Processes of sharing issues among participating groups in the form of a food and nutrition education network: The case of the [S Network]

Hisako TANAKA<sup>\*,2\*</sup>, Midori ISHIKAWA<sup>3\*</sup>, and Miyuki ADACHI<sup>4\*</sup>

**Key words:** food and nutrition education, network, sharing issue, commitment

**objective** To review processes of sharing issue among participating groups in the form of a food and nutrition education network and elucidate how organizations develop commitment and how individuals change their attitudes.

**Methods** (1) process regarding the form of a food and nutrition education network: After discussions by administrative public health nutritionists at public health centers and meetings with faculty members at J University, We encouraged three groups to participate in a network to share information on food and nutrition issues and gave them opportunities to interact with each other. Group A primarily provided food and nutrition information, group B primarily provided foods, and group C provided both. Specifically, these activities included two open community programs and eight volunteer activities. In the first open community program, they identified capacity to be developed through food and nutrition education and volunteers explored possible cooperation among organizations on the basis of the categorization and classification of issues. To provide feedback on the results, a workshop was held during the second open program.

(2) Analysis of the process: We documented organizations involved in the form of a food and nutrition education network from 2003 through 2006, the processes and details of their activities, and activities and remarks by participants. These documents were classified by issue, broken down into categories, and listed chronologically with titles for characteristic entries, thereby reviewing the processes. On the basis of these results, we asked participants who were involved in the entire process of the construction of the food and nutrition education network to review their own activities, and we then investigated the changes in their attitudes.

**Results** (1) A total of 63 persons in 34 organizations participated in open community programs. Local food issues included changing dietary behaviors along with diversification of lifestyle; problems with cooking, eating, and continuation of tradition because of the lack of nutritional knowledge and experience; and the uncontrolled flood of information. Participating organizations were found to engage in different activities to address nutritional issues. In addition, insufficient or low efficiency activities were identified, indicating the need for cooperation.

(2) Issue-sharing processes consisted of the following three steps: identification of local nutritional issues, characterization of group activities to address food and nutritional problems, and exploration of possible cooperation among groups. Analysis of attitudes of three persons participating in the entire process of network construction revealed their interest in other organization activities and sympathy with other organizations.

**Discussion** Factors for promotion of sharing issue include (1) our support to allow them to share food and nutrition issues in the early stages and thereafter, and (2) repeated deliberations within open community programs involving information and feedback from prior identification and analysis of problems, as well as selection of activities.

\* Kagawa Nutrition University

2\* ex-Saitama Prefectural Iruma-nishi Public Health and Human Services Center

3\* Nayoro City University

4\* Nagoya University of Art and Science

# 発題論文の理解と活用 ― 著者から

## ネットワークづくりにおける実践と理論のキャッチボール

田中 久子

### はじめに

本論文は筆者と足立が企画した実践活動に、石川が研究者として関わり、共著論文としたものである。雑誌投稿にあたっては、行政で働く管理栄養士・栄養士及び連携・協働する他職種に向けて発信したいとの思いがあった。アクセプトされるまで長期間を要したが、結果的にこの間の議論の積み重ねが本論文の特徴を明確にすることにつながったと思う。本誌の目指すもの(第1号p2~5参照)を念頭にいれつつ、その後継続している活動を通して本論文を再考し、今後の活動の可能性や問題点等について述べてみたい。

### テーマ論文の再考

本論文の事例としたS食育ネット(以下「ネット」)は、活動当初は研究的なアプローチを念頭に入れたものではなかった。最初は、食育を地域のネットワークの中で高めていきたいとの思いを持った関係者と一緒に活動を行うことで精一杯だった。ただ、活動の中で大切にしていたことは、参加する一人ひとりへの対応を重視したこと(通知文書は出席しやすい内容に修正する等)、活動をきめ細かに記録したこと(参加者氏名を記録、気づいたことをメモする等)であった。しかし、そこに研究者が関わったことで活動を客観的に見ることができ、ネットワーク形成における課題共有プロセスを研究として整理することが可能になった。実践活動に研究的なアプローチが加わったことによる成果は、以下のような「考察」としてまとめることができた。課題共有のプロセスにおける組織コミットメントの形成には、①地域の食の課題の確認段階、②食の課題をめぐるグループ活動の個性の明確化の段階、③各グループ同士の連携の可能性の段階の3段階のプロセスがあることが確認され

た。また、ネットワーク構築には、パートナーとしての信頼を維持する個人的な人間関係が重要であり、課題を共有するプロセスも組織のみならず参加者個々人の人間関係を築くことにつながることを考えられた。

一方、その後、事務局の変更、行政メンバーの人事異動等により、コミットメント形成が崩れたことも考えられる。また、個人や組織のニーズは多様なことから、「ネット」継続における組織コミットメントの形成についての検証は今後も継続的に行っていく必要があると考える。

### 実践現場への活用の可能性や問題点

本実践で用いた教材(①人間・食物・地域(食環境)のかかわりの図(「食環境図」)、②プロポーズ作戦のためのワークシート)について、「ネット」形成との関わりから述べる。まず、①の「食環境図」については、準備段階では食情報提供のグループのみで、食物提供グループと両方の活動を行うグループの参加がなかったことから、意識的に後者のグループに働きかけた。また、課題確認段階、個性の明確化・連携の可能性の各段階で「食環境図」を用いてグループごとにチェックしていった。これにより、ネットワーク形成が可視化され、関係者が具体的に進捗状況を確認することができたと考えられた。次に、②のワークシートは、食育で育てたいこと、不得意なこと等が記されることから、各グループの活動の情報源となり、ネットワークを組みたい個人やグループがわかる。なかでも、「食育で育てたいこと」は、各グループと地域が同じ方向であることが重要なことから、活動の初期段階(準備会)で実施することが有効であると考えられた。

### 著者略歴

女子栄養大学教授。専門は公衆栄養学。管理栄養士。埼玉県健康増進部、埼玉県入間西福祉保健センターを経て現職。



## 課題共有のプロセスを他地域で活用した新たな視点

石川 みどり

S食育ネットにおいて、当時、論文中のJ大学に所属していた私の役割は、活動に用いる資料の準備、活動への参加と補助、使用された資料・参加者の発言等のデータの整理であった。その中で観察できたことは2つ。1つ目は、参加者個人と所属グループの両方の特徴を生かすことが重要で、参加者は両方が把握できたときに活動への態度が変わる。2つ目は、グループの活動や課題を整理するとき、やり方や結果によって出入りする個人・グループが変わる、ということだった。つまり、個人・組織の関係が“ゆるやかな状況”で食育ネットが進んでいるということである。そのことに注目し、分析の視点(切り口)を迷いつつ、全ての文字データを数量化しなまま分析を進めた。

論文を承認してくれるのか不安であったが、査読の先生の「本テーマを研究する意義は大きい」という評価をいただいた。と同時に、やはり分析の視点の理論不足を指摘されたため、著者3名で再検討することになった。その決定に相当の時間がかかったが、査読の先生のアドバイスもあり、「組織コミットメント」の考え方をを用いて分析を行った結果、それまでは曖昧だったデータの分類がしっかりと位置づけられたと感じた。

その後、北海道名寄市で農業高校から食育の相談をうけたとき、S食育ネットの応用を考えた。農業生産者育成を担う高校の特徴、課題を話し合ううちに、高校生は生産した食物の成分や機能性を学習する機会がない、生産物の対面販売学習の後、販売された食物はどのような食事となって、どのような人がどう食べているのかを知らない、という課題を確認した。それらを改善できる組織・団体を検討し、最終的に、「農業高校生が生産した食物を活用した給食と、給食だよりを小中学生に提供する」プログラムを作成し、小・中学校、農業高校、大学が連携した地域の食の循環を体験する教

育とした。しかし、児童・生徒・学生をめぐるさまざまな状況がある中で、学校給食では、学校給食センター以外に、教育委員会、校長会、各学校の校長・教師、給食委員会、保護者、食品衛生指導の担当保健所、高校では北海道教育委員会、校長会、高校の一般教科も含めた教職員、大学では学長、事務局長、食品学の教員との合意や協力体制づくりも必要だった。そのため、それら組織の連携体制をつくりつつ、食育プログラムを進めている。

今、この連携の構築プロセスをS食育ネットで活用した「組織コミットメント」の視点で考察してみると、名寄市内の教育組織とそこで働く教職員の「食育のための教育組織コミットメント」が生まれてきていると思う。すなわち、定義をふまえれば“学校教育組織の一員としての願望・努力”“学校教育組織の目標や価値への信頼”を位置づけるネットワークづくりである。

では、改めてS食育ネットの特徴をみると、組織コミットメントの意味より、さらに広い“参加者個人”の願望や価値も入り、それらが自由に入出入りするゆるやかなコミットメントであると思える。S食育ネットの現実をよりの確に表現できる分析の視点について、さらに検討を深める必要性を感じている。

### 参考文献

石川みどり、久保田のぞみ、大久保美幸、半田美知：農業高校生が提供した給食だよりによる小中学生の給食に関する態度・行動への影響、日本栄養士会雑誌、5(11)、26-36、2008

### 著者略歴

名寄市立大学准教授。専門は公衆栄養学、国際栄養学。博士(栄養学)、管理栄養士。開発途上国での栄養改善活動・研究に関わる。

# 発題論文の理解と活用 ― 実践的視点から

## ネットワークづくりの長い道のり

野渡 祥子

この論文の緒言に書かれているとおり、保健福祉の分野で、ネットワーク形成のプロセスをつまびらかにした論文はあまりない。食育の分野でこのネットワークづくりのプロセスを検討されたこの論文の意義は大きいと思う。神奈川県では保健福祉事務所管内ごとに、地域の栄養・食生活の課題を改善するために、関係機関の代表が集まり検討する会議を設けていて、私も足柄上地域の委員を務めているが、ここ2、3年は食育の推進がテーマとなっている。また私自身、病院にかかった糖尿病の患者さんを地域で支える連携ネットワークづくりを模索していることもあり、この論文の内容には大いに興味を持った。とともに、自分がうまくやれなかったところや示唆されたところが少なからずあったので、述べてみたい。

まず、事例となる「S食育ネット」立ち上げの契機となるのが、「地域の人々の食をめぐる課題を解決するために、役立つ情報交換などをよりスムーズに行えるネットワークがほしいという声が聞かれるようになった」という点である。このような声を聞かせてくれる人々と、聞く耳を持つ人がいたということであり、行政に関わるものとして広くアンテナをはり、まずは人と人の繋がりが重要であることがわかる。そしてそれを実現しようとするためにネットワークに関わる参加グループを、人間と食環境との関わり視点を取り入れた食生態学の枠組みという理論を活用し、食物へのアクセスと、食情報へのアクセスという両面から多様な組織が参加できるように呼びかけている。理論の裏打ちにより多様な組織が参加することは、ネットワークのその後の活動に大きな影響を与えると思う。こういう食の課題の特徴に対する視点がぶれないところは、大いに学びたい。

しかしながら、実際に把握され参加した団体や組織は保健福祉分野で所管する範囲にとどまり、接点の少ない組織があまり見受けられない。子育てグループ、学

生ボランティア、地域のミニコミ誌、書店、コンビニエンスストア、商工会議所、料理教室なども案外乗ってくれそうな気がするが、利益を追求する組織などでは不都合だったのだろうか。

次に、グループの初見の機会の設定、全体会議での地域の食の課題の確認、各グループの活動の独自性の明確化へとすすむが、これをアレンジするのは保健所栄養業務担当者である。これだけの業務をこなすのは、担当者としてもかなりの経験と力量が必要である。ましてや、行政の関係者でない者が立ち上げていくのには、並大抵の労力ではすまないと思われる。また、苦勞して立ち上げたネットワークが担当者の交代などで、1、2年で終わることも多く見られる。今後活動が少しずつ広がり、継続されるようになれば、ネットワーク関係者による自主的な運営へのプロセスも構築していく必要があると思う。

最後に、この論文の目的の一つである「組織コミットメントの形成」については、概念の説明がもう少しほしいと思った。

ネットワークづくりの道のりは長いですが、この論文のように、理論的なプロセスの構築や成功した事例の分析が積み上げられていくことを切に望む。

### 著者略歴

神奈川県立足柄上病院栄養管理科長。管理栄養士。神奈川県立短期大学助手、保健所栄養士を経て現職。

# 発題論文の理解と活用 —— 研究的視点から

## 食育への活発かつ多様な関心を示唆する第3のグループ

中島 正道

本論文は、足立己幸の本誌創刊号の「人間・食物・地域(食環境)のかかわり」(図1、p3)の示す「食生態学の枠組み」(以下では、「枠組み」)を方法論的基盤としつつ「S食育ネット」の発展過程を分析したものである。枠組みにはその左端に食情報システムがあり、右端にフードシステムがある。この両システムは、理論的に想定されたものである。本論文の「S食育ネット」においては、A食情報を担うグループ、及びBフードシステムを担うグループというように社会的行動主体の機能属性へ読み換えられ、それにより、方法の現実対応度が高められている。枠組みを意識しつつ、S食育ネット参加グループが分類され、情報提供(A)施設と食物提供(B)施設とに関連するそれぞれのグループが確認されただけでなく、情報提供と食物提供とを並行して行う各種施設に関連する多様な第3のグループの存在が浮き彫りにされている。本論文は、この第3グループを「Cグループ」と呼んでいる。具体的には、保育園・小学校・高齢者施設・病院・ふれあいサロン・フリーで活動している栄養士の会・食生活改善推進員協議会が挙げられている。

本論文を読んで、強いイメージ喚起力を持っていると感じられるのは、この第3のグループである。次世代育成支援・食育への取組みが国家的課題となっている中で、Cグループ冒頭に保育園・小学校が示されているのは当然であるが、病院以下の各グループがかかわっていることは、S地域における食育への活発かつ多様な関心の所在を示唆している。これに対して、Aグループ・Bグループには既存の専門化された施設・団体・企業等が分類されている。

本論文の示す調査・研究過程は、県レベルの福祉保健総合センターと県内J大学教員との協力による「啓蒙的アクション・リサーチ」により、食育関心グループ群との接点設営、ワークショップ、「プロポーズ作戦」等の多

彩な手法により、問題共有・グループ間連携・食育ネット形成・食育ネットへのコミットメント実現に及んでいる。叙述・図表とも良く練られ、「枠組み」活用の好モデルとなり得ている。

アクション・リサーチは、アメリカで州レベルの行政課題の調査研究と課題解決への試験的施策とを併用する試みから形成され、社会学分野では比較的よく知られている手法である。近年では類似の手法が、やはりアメリカの行政学分野で発達し、「政策実験・政策評価」として手法的にも多面的な展開を見せている。日本でも、「家庭ゴミの分別排出・収集システム」の形成や「道の駅」など多くの事例がある。

S食育ネットの場合には、「アクション・リサーチ」についての社会学的知見を前提にもせず、参照もせずに、ひたすら地域の食育に取り組もうとした関係者の真摯な努力と、試行錯誤を恐れず、耐えぬいた関係者の粘り強さが、最後の「コミットメント」をもたらしたのであろう。

日本の応用社会科学分野の若手研究者の参画が得られるならば、S食育ネットについて次のような調査研究が行われることを希望したい。(1) 代表的な好実績グループの活動についての「キー・パーソン研究」及び「参与観察」の実施、(2) 中間的なごく普通のグループについての「フォーカスト・グループインタビュー」の実施、(3) 栄養学的に大きな問題点(克服すべき課題)を持つグループについてのサーベイランスの実施。

### 著者略歴

日本大学生物資源科学部教授。専門は食品経済学。博士(農学)。主な著書は「食品産業の経済分析」(日本経済評論社)他。学生時代より地域ボランティア諸活動への参加経験がある。



# 発題論文の理解と活用 ― 誌上フォーラム

この「誌上フォーラム」は、「食育ネットワーク形成における参加グループの課題共有のプロセス『S食育ネット』の事例」論文について、NPO食生態学実践フォーラム会員の方々からの意見が集う広場（フォーラム）です。

本論文を読み、S食育ネットの形成プロセスについてよく検討されているという感想を持った。なかでも、有志の活動に注目することで、住民参加型のネットが強まっていくことが具体的にわかった。例えば、表2に示されているように、S地域の食の課題の中から、参加グループで合意した課題を3つ挙げ、課題解決の活動と方策を整理していくのはわかりやすい。このように共有する目標設定があることで、それぞれのグループの活動内容にも幅が出てくると思う。また、表3のようにグループ同士の連携の可能性を整理してみることで、全体の中での自分のポジションの可能性を確認することができる。ゆるやかなネットワークなら私たちもできるのではないか、という自信を与えてくれる。

小嶋 京子(埼玉県・行政栄養士)

課題共有がネットワークづくりのキーとなることに着目している点に共感できました。この段階での参加者の問題意識や態度が、その後の活動意欲・成果に大きく影響することは私自身が経験的に感じるところです。また、さまざまな組織と食の課題について意見交換しているとすっかりわかったつもりになってしまいがちですが、出発点から人々の意識や行動を丁寧に記録・整理している点も参考になりました。

地域の食育推進の要はネットワークであると言われていますが、何をどのように働きかけ、課題を整理し、目標を設定していけばよいのかのマニュアルや手本はありません。本論文は「評価したい。見直したい。でもどうすれば?」と、私も含めてもやもやしている人達にヒントをくれたように思います。

小林 陽子(東京都・専門学校教員・元行政栄養士)

川崎市では食育の推進にあたって、まず給食施設の栄養士と在宅栄養士が集まり、食育ネットワークづくりについての意見交換をしました。その際、本論文の田中久子さんから問題提起をいただき、参加者から「食育ネットワークづくりのヒントが得られた」「川崎市では先に食育推進計画ありきだったので、坂戸市の方法はとてもよい」という声が聞かれました。

一方、保育園・幼稚園・学校・農業・給食施設等、食育に関わる多分野の組織「高津区食育推進分科会」を設置し、地域の食の課題を確認しようとしたところ、人により食育の認識が異なり、課題を共有する以前のところで立ち止まる場面がありました。発題論文では「トップダウンではないネットワークの構築」が念頭にあり、「有志Gによる課題解決の検討」「これまで少なかった組織とのネットワーク化」等、従来みられなかった考え方や手法が用いられています。

私の悩みを解決するキーワードは「ゆるやかなネットワークづく

り」ではないかと思ひ始めています。

小野寺 一枝(神奈川県・管理栄養士)

計画策定や施策・事業展開のプロセスで、関係者と課題を共有することは基本的事項である。しかし、課題の共有レベルは現状把握(情報の共有レベル)から、課題解決(取り組みレベル)まで様々である。行政は事業期限の制約もあり、前者の課題共有が一般的である。また、行政規模(地域)が広がるほど、構築するネットワークは組織の構築に主眼が置かれ、ネットワーク本来の目的を十分に発揮できない事例も経験した。

発題論文は地域の多様な関係者がスタートの段階から、課題の特定、課題の分析、活動の選択に関わり、有効なネットワークが形成されることを論理的に説明しており、現場に適用できる研究モデルである。一方、研究モデルの活用を考えると2つの課題が残る。1つ目は、研究モデルが適応できる地域の規模はどの程度か。2つ目は、活動が類似する組織や関係者間の場合の課題共有のプロセスをどのように進めたらよいかである。

菊地 圭子(宮城県・行政管理栄養士)

私は歯科衛生士としての職を通じて、食育に関心をもっていたことからS食育ネットの一員になった。本論文を読み、S食育ネットの経緯が理論づけられていることや、今後の活動について考えさせられた。そこで、参加者の一人として、本論文の行間に隠れているS食育ネットの継続と発展を可能にした3つのポイントを挙げたい。1つ目は専門家による理論と経験に基づく黒子の支援、2つ目は立場や職種を異にする者への呼びかけと受入れ、そして3つ目は各自ができることを自由にのびのびと手を挙げて参加できる状態を作ること、である。

秋吉 敏子(S食育ネットメンバー)

「名古屋コアでの活動の方向性を考えるための示唆を得たい」とこの論文の抄読ゼミを開きました。自分たちのできる(得意な)こと、できない(苦手な)ことをはっきりさせることの大切さ、公開活動と有志による活動を組み合わせるなど魅力的なプログラムの必要性、参加するグループの本来の活動目標や方法を第一に尊重して進める“ゆるやかな”ネットワークづくりの重要性等多くのことを学ぶことができました。

名古屋コアの可能性として、食情報の提供を行うグループとしての活動、コーディネーターとしての活動が考えられる中で、より多くの仲間と“ゆるやかな”ネットワークを作っていくためのポイントを確認することもできました。

西尾素子、平田なつひ、安達内美子(食生態学実践フォーラム名古屋コア)



## より理解を深めるために

発題論文の研究デザインや食教育プログラムに関する理論、関連する先行文献、分析手法等に関する情報コーナーです。

### 看護師における「組織コミットメント」の概念分析、看護研究,38,2,139-151,2005

上野恭子

組織コミットメント(organizational commitment)は、1970年代から心理学領域において組織メンバーが組織に対して抱く心理的関係を扱った概念である。本編では、看護職において組織コミットメントがケア行動の質に影響する概念としての整理と看護分野への応用的検討を行っている。特に3つの心理的状態:情動的要素、継続的要素、規範的要素(Allen, Meyer:1990)とそれらの先行因子(Moedayら:1979)で構成されることに注目し、看護職への応用として①専門職メンバー間に共通した価値観・アイデンティティの存在、②キャリア形成につながる地位に移動できる流動性、③個人が専門的の行為を実行する際の判断と自律性についての関連モデルの構築を試み紹介している。

### コミットメント—熱意とモラルの経営—,ハーバードビジネス・レビュー編集部,ダイヤモンド社,東京,2007

ハーバードビジネス・レビュー編集部

ハーバード大学大学院ビジネススクールでは、コミットメント形成と経営マネジメントの検討を深めており、本書は教授陣の考察を1冊にまとめた日本語版。組織ビジネスの成熟につれて、戦略の枠組み、経営資源、プロセス、関係、価値観の5つのタイプのコミットメントが補強されるが、それらは変革のためのエンパワメントの増減に影響を与えるという。また、企業の価値観、継続性は、組織メンバーの2つの異質なコミットメント(内因的コミットメント:当事者がゴールの重要性を決定する、外因的コミットメント:業務到達の重要性を他者によって決定する)と関係があるが、両者は矛盾するものなので、その解決策が必要だが、高度なエンパワメントを実現しうる変革プログラムは難しいとする。

### Chapter 6 Foundation in Theory and Research: Promoting Environmental Supports for Action, pp.147-165, Nutrition Education, Linking Research, Theory and Practice, Janes and Bartlett Publishers, 2007

Isobel R. Contento

コロンビア大学大学院の栄養教育のテキストであり、第6章「食環境」でネットワーク構築について論じられている。環境にはEcologyとEnvironmentがあり、Ecologyは自然に影響される環境的要因で食物生産やフードシステム等で、Environmentは社会規範や行動に影響を与える決定要因に関するものでソーシャルサポートやソーシャルネットワーク、地域の食習慣や社会構造がこれにあたる。食物選択や摂食パターンは家族、仲間、一緒に働く人との関係等のソーシャルネットワークにより影響を受ける。

栄養教育には健康を維持・改善させるためのネットワーク(家族の巻き込み等)や構造的なソーシャルサポートグループの提供(仲間の助け合いシステムや定期的ミーティング、ウォーキンググループ等)を強化することを含むとする。

### 農業高校生徒の提供した給食だよりによる小中学生の給食に関する態度・行動への影響,日本栄養士会雑誌,51,11,26-36,2008

石川みどり

S食育ネットの研究・実践成果を応用し、北海道N市において生産から食卓までをつなぐ食育の開発の試みを報告した。小中学校・学校給食センター・農業高校・大学栄養学科の連携により、農業高校生の生産した食物を学校給食として小中学生に提供し、かつ農業高校生が給食だよりを作成し小中学生に情報提供を行うプログラムを実施した。その結果、小中学生の66%が農業高校生徒の掲示した給食だよりを読み、給食たよりを読んだ者は給食がおいしかった、給食を全部食べた、友達と話した、家族と話した行動に影響を与えたことが確認された。

# ■ 学習者と支援者の間で活躍する教材たち

## 共「食」手帳を使って—福祉施設で多職種の合同研修

谷口 友子

昨年の秋に、共「食」手帳・シニアステージ編（足立己幸・高橋千恵子・小川正時著）が発行された。表紙に「マイサイズ、マイゴール、マイペースですすめる、食からの生きがい・健康・地域づくり」と表記されている。この手帳のコンセプトは、人間の尊厳である生きがい・のぞみ・健康の尊重を重視し、個人の生活を始点にしつつも、楽しくみんなで活用し、仲間づくり、地域づくりを可能にするという願いがこめられている。

この手帳のテスト版の検証実験に協力することを通して、共「食」手帳と出会い、高齢者の生活支援を実践するとともに、専門サポーター研修などに活用したことをまとめた。

### 共「食」手帳の誕生

数年前に厚生労働省の研究事業に協力し、地域の高齢者の1ヶ月間の食生態調査を実施した。共「食」手帳は、これらの1ヶ月調査が基礎資料となり、テスト版手帳の検証実験を経て生まれた。なお、1ヶ月調査時の高齢者グループは、その後「食と健康の会」をつくり、現在も自立した活動を続けている。

### 共「食」手帳の構成と内容

共「食」手帳は、生きがい・くらし+からだ・健康+食事・食行動+地域・環境の4つのテーマについて、自己チェックができるように構成されている。また、「自分に合った目標」「自分に合った内容」「自分に合ったすすめ方」を自分自身で決めて実践できるようになっている。実際に使ってみると、自分で目標を設定できることで気持ちにゆとりができる。また、文字の大きさなどに配慮があり、人にやさしい内容となっているだけでなく、おしゃれな紙面構成も魅力的である。さらに、簡単でわかりやすく、かつ科学的根拠がはっきりした“魔法のものさし”「3・1・2弁当箱法」を使うことで、実際の生活の中での食事を見直していくことが期待できる。

### 共「食」手帳を用いた専門サポーター研修

昨年の秋に、仲間との“食卓づくり”をコンセプトにした小規模デイサービスをオープンした。平屋木造の建物で囲炉裏があり、高齢者に配慮した台所も整備され



ている。裏庭には釜戸や井戸も。オープンまでの準備段階で、「共『食』手帳専門サポーター研修」を企画し、テスト版手帳を用いて、食や介護の専門家、医師、看護師に専門サポーターとしての役割を担ってもらった。今ではデイサービスに集うお年寄りが、「昼食の汁物のメニューを考える」「食事前にテーブルを拭く」「自分と仲間たちの箸を用意する」「一緒に食べ談笑し食器を洗い片付ける」「おいしかったかどうか情報交換をする」などの多様な共『食』行動が、専門サポーターの支援により成り立っている。自分の役割を自分で決めることで、お年寄りの生活行動が多様になり、仲間との会話が増え、表情が豊かになったと専門サポーターが話してくれた。

専門サポーター自身からは、「数値中心の栄養学の知識しかなく、普段の食事に疑問をもっていたが、実際に調理してみるとわかりやすく窮屈ではなかった」「研修後、自分の健康への意識が変わり、食事を大切に、楽しめるようになった」「現状の課題を分析する視点が持てた」「食の知識を現場で活かせる大きなヒントになった」などの声が聞かれた。

すべての流れを一覧表にすると、  
分担(食事づくりの共有)もしやすくなります

自分たちが担当をする場合は○印


年 月 日 / 場所

分担者名

サポーター名

行動	担当	担当者 の氏名	安全衛生 のチェック	仕上げ 予定時刻	完了 したる	注意事項 など
① エンブレム 共食の設計図を描く 料理とその組み合わせを決める(献立)	○					
② 準備 材料をそろえる 発注 入手・検品 保存・とり出し 道具をそろえる 食具/熱湯、なべ、小道具など 食器/弁当箱、はし、湯のみなど	施設のキッチン					
③ 料理を作る 下ごしらえ 洗う 切る 加熱する 調味する 食器に盛る など						
④ 食卓を作る 配膳 はし、スプーン 飲み物 食卓 食事室の環境 食べる人への声かけ	○					
⑤ 次の準備へ 食器を洗う、片付ける ゴミ 再利用、保存	○					
⑥ 評反面 次の共食のために 評価、反省	○					

共食タイム



25

## これから

現在も、特別養護老人ホームでお年寄りと日々向合い、最前線にいる介護職員に「共『食』手帳サポーター研修」を継続して実施している。これは、筆者がかねてより切望していた企画であることから素直にうれしい。「楽しかった」「知識が広がった」「もっと早く企画してほしかった」と反響は大きい。まずは1回目(2時間)に現状の振り返りを行い、2回目の研修へと進める予定である。教材として優れたものが存在しても、現場で活躍する学習者たちのタイプによって、研修の内容は変える必要があるだろう。

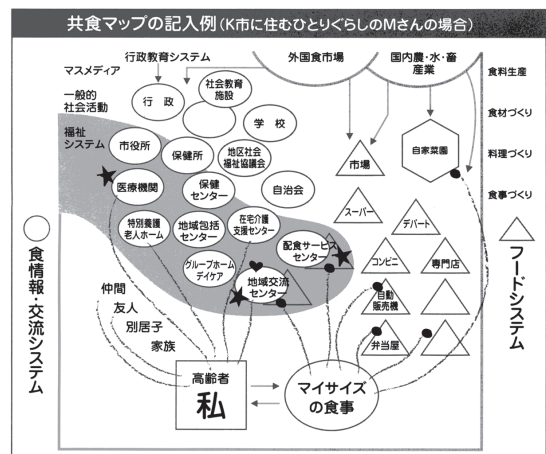
専門サポーター研修の経過をさらに検証し、共『食』手帳を実践する者と研究者を繋ぎ、地域で生活する人々が自分らしい食生活を営むことに寄与していきたい。

## 著者略歴

社会福祉法人健友会 特別養護老人ホームみなみかぜ施設長。川越市介護保険認定審査会委員。看護師。国立がんセンター、埼玉障害者リハビリテーションセンターを経て現職。

質問2 マイサイズの食事を準備し、食べて、健康や生きがいアップのために地域のシステムを十分に活用していますか？  
いつも実際に利用している場所や組織に●印を付けてみましょう。

これらは、マイサイズの食事、食生活アップに充分ですか？  
地域にあるのに活用していなかった、地域にないのでぜひ作ってほしい、あるいは自分たちの力でそれを進めたい…共食マップを描くことで、いろいろなことが見えてきます



質問3 私の共食マップ 記入日 年 月 日  
楽しい共食ができそうな場所、または共食したい場所に、  
♥印を付けましょう。



# 実践報告

## 「自然から食卓まで子ども自身が構想し実践する」 食教育プログラムの開発と評価

足立 己幸、針谷 順子、薄金 孝子、吉岡 有紀子、平本 福子、食生態学実践グループ

### コンセプトとその実施体制

1983年夏、蔵王連峰の宮城県側山麓に新設した「ライブイン蔵王セミナーハウス—食生態学生活実践施設」を起点として出発した「自然から食卓まで、子ども自身が構想し、実践する食事づくりセミナー」（以下一部名称を変えるが、主旨の変更はないので、本稿ではセミナーと略称する）はp22の表1に示すように、昨年で24回を重ねた。次項に示す学術的、実践的目的を持って、夢中ですすめてきた内容が、望ましい方向と成果を得てきたのか、これからの課題は何かについて国際的な視野とレベルでの議論がしたいと、第15回世界栄養士会議でポスター発表を行った。発表の場で交わされた国内外の栄養専門家たちの質問や討論をふまえて一部修正を加えた。本誌創刊号の「創刊に当たって」で提案した“実践と理論の間”をつなぐ方法探しの議論としたい。

#### セミナーの出発時のねらい

資料1は出発段階に作成したセミナー参加者募集の案内文である。食育基本法が制定され、全国的に生産から食卓までを視野に入れる「食」育への認識が広がってきた現在では違和感がない文章だろうが、25年前の日本では、栄養教育の枠を超えている、他の専門領域に踏み込みすぎると、忠告や叱責も少なくなかった。文中にこめたセミナーの主旨・コンセプトは次の7点になる。

(1) 人間の食について“自然から食卓まで”、すなわち食料生産、加工、流通・販売、料理づくり、食事づくり、廃棄・再利用、味わい食べる、体内での代謝・栄養・健康づくり、生きる力の形成、家族・地域・地球の生きる力・生活力・労働力の形成……次の食の営みへとつながる「食の循環」の全体像を育てる

(2) 子ども自身が自分で考え、意思決定し、行動・実践する力の形成、いわゆる「食生活を営む力」の形成

(3) 料理作りだけでなく、食事（食卓）づくりの重視  
これらの質を高めるために

(4) “学びあい”学習の重視。子どもたち同士はもちろん、セミナースタッフとして参加する大学生、大学院生、栄養・食・教育・健康等関連の専門家が、それぞれの研究や実践課題を持って参加する

(5) 地域の食活動や生活文化のベテラン・専門家から直接学ぶ。地域の日常活動の中での体験学習の重視

(6) 科学的根拠のある内容。食行動や栄養については科学的根拠が成熟していないことが多いので、関連

する研究を進めるプロセスを内容とする。

以上を含めて、

(7) セミナーでの実践は「食生態学」研究や実践の理論（仮説も）についての“生活実験”（周りの条件を厳密にコントロールして進める、いわゆる実験室実験とは異なる。周りの条件をできるだけ捨象しないで、それらの関連性を含めて検証する実験の意味）である。

この作業は研究者だけでは成り立たず、多様なバックグラウンドの学習者との複合研修で可能であろう。

以上、手が届かないほどの高い望みをもって、本セミナーは出発した。

#### セミナー実施体制の概要(表1)

<1983~2004年>

1973年に、筆者が女子栄養大学に着任して以来の念願だった「食生態学研究室」設置が実現し、当時、地域・環境とのかかわりをキーワードにする食生態学研究と教育の具体的なフィールドが必要であった。加えて実践現場で人間性や地域性を重視した栄養・食教育の方法を模索し、研究室周辺に集う現場栄養士たち（時を同じくして「食生態学実践グループ」を形成）と共有できる“実践的なよりどころ”が必要であった。端的に言えば、研究（理論検証やプログラム構築）、大学生等次世代の専門家教育、現職専門家研修を実現する共通の“実践的なよりどころ”が必要であった。

幸いにも、“実践的なよりどころ”設営の趣旨に賛同し、



土地を提供してくれた高橋守氏やその関係者ならびに食生態学実践グループメンバーの経済的な支援を得て、「ライブイン蔵王セミナーハウスー生活実践施設」が建築された。その後、関連する社団法人等からの研究助成金を受け、参加者たちが一堂に会し、研修成果を共有できるホールを増築する等、研修環境を向上させつつ、研修内容の充実に対応した。

一方、セミナーの企画・準備・スタッフの養成・運営・評価等の一連の活動拠点を、2004年までは、女子栄養大学食生態学研究室に置いてきた。セミナーを研究室活動の一環として位置づけ、歴代の研究室スタッフ、大学院生、学部生、研究生が関わり、前記の食生態学実践グループのメンバーと協働で実施した。セミナーの経費については、研究室の教育研究費と参加児童の参加研修費を中心に、関連財団による研究助成金を充当して、継続実施した。

研究室メンバーや学生の関わり方はいろいろであった。修士論文研究テーマをセミナー関連で持ち、セミナーの企画・準備、期間中のメインメンバーとしての役割、学生への指導、セミナー報告会の開催・準備・実施・報告、収集されたデータの整理、研究課題に対する分析・論文化、全体の年次報告書や記録(アルバム等を含む)の作成、次年度への引継ぎのフルコースを中心的に担う大学院生もいた。

さらに、食生態学実践グループのメンバーは帰属する大学等のスタッフや学生を伴って、中には研究室員全員がゼミのテーマとして、参加することもあった。高知大学教育学部針谷研究室、宮城学院女子大学平本研究室、相模女子大学吉岡ゼミ生などである。

なお、毎年、上記研究室スタッフ、大学院生、研究生がセミナーの事務局長として、責任ある仕事を担当した。

## <2005年～現在>

NPO法人食生態学実践フォーラムの設立により、セミナー活動の拠点はNPOの事務局に移る。実践部門担当理事が運営委員会に全体プランを提出し、セミナー担当グループが形成され、具体的な企画・実施・評価・報告のフルコースのマネジメントを行う。また、NPO法人会員を中心とする専門家のための「食生態学プロモーターズ研修」を開講し、セミナー期間中は参与型研修が行われている。

さらに、セミナーの会場を埼玉県川越市にある社会福祉法人健友会「みなみかぜ」地域交流センターに移した。セミナーの主旨・コンセプトをふまえ、かつ高齢者福祉施設である特徴をいかして、医療・福祉や地域づくり関係者との協働が可能になってきた。今後、従来のセミナーでの蓄積を十分に活用し、住民の生活の質と、環境の質のよりよい共生をめざす、新しい食育プログラムの開発・実践へとシフトしていきたいと話し合いを進めている。この時期の運営経費は、NPO法人食生態学実践フォーラムの活動予算を受けて、参加費を基礎に進めている。

以下、24回のプログラムと評価、まさに「自然から食卓まで」に関わる多くの関係者との連携、巣立った子どもたちの地域での活動、の3側面から、具体的な報告をする。

## 謝辞

紙面の都合で具体的な紹介をすることができなかったが、多くの子どもたち、多くの組織、団体、グループ、個人の方々の協力・協働なしには、セミナーは継続実施できなかった。関係の皆様から感謝し、今後の着実なセミナー活動を期待していただきたい。

(執筆：足立 己幸)

## 資料1 食事づくりセミナーのねらい

最近、子どもたちの食生活が身体づくり、心づくりの両面から種々の問題をかかえていることが指摘されています。これらの問題点を解決するために、家庭で、学校で、地域社会で、おとなたちが積極的に努力をしなければならないことは、いうまでもありません。

私たちは、ひとりでも多くの小・中・高校生が、いきいきと健康な人間らしい食生活を楽しめる力を育ててほしいと願ってきました。ふだんから食事や家族や友だちといっしょに落ち着いて食べることや、自然の産物を活用し、日本や世界の各地で育てられてきた「知恵」に学びながら、魅力的に食事をつくることのできる力、人間としてあたり前のこうした力を育てることをねらって、「食事づくりセミナー」を開講しています。

食生態学の研究や実践の成果、とりわけ「主食・主菜・副菜の組み合わせ」を基本にする食事法と、食事づくりをシステムとしてとらえる食事づくり法をもとにして、子どもたち自身が食事を設計し、つくり、みんなで食べてみる生活実験・実践を食生態学実践セミナーハウスでやっています。

大学などの研究者だけでなく、学校や社会教育の現場で活躍している専門家、地元のこけし職人、農業者や生活改善グループの人々など、人間らしい食生活に関係のある多分野のメンバーが、それぞれの力を出し合っていることも特徴です。

# 「自然から食卓まで子ども自身が構想し実践する食事づくり」

回	年	テーマ	サブテーマ	期間	実施場所	参加者数	学習支援スタッフ
1	1983	自然から食卓まで子ども自身が構想し実践する食事づくりセミナー	Aコース	4泊5日	宮城県蔵王町ライブイン蔵王セミナーハウス	7	食生態学実践グループメンバー、大学教員とそのスタッフ、栄養系・教育系・看護系大学院生、学部学生、NPO法人食生態学実践フォーラム  地域の関連職種や行政の協力が加わる(テーマに合わせて要請した専門家の協力)  との企画・準備から連携協力する専門家、機関が加わる) 地域の専門職種の連携・協力(テーマに合わせて地域の専門家  専門職種が加わる 福祉、医療等多様な
2	1984		Aコース			57	
			Bコース				
3	1985		Aコース			88	
			Aコース				
			Bコース				
4	1986		Aコース			61	
			Bコース				
5	1987		ぴったりおやつづくりセミナー			29	
6	1988		朝食づくりの名人になろう			42	
7	1989		丸ごと食の名人になろう			41	
8	1990		食事づくり&口の中ウォッチング 食事づくり&バードウォッチング			51	
9	1991		ダイエットの名人になろう			24	
10	1992		飲み物探検の名人になろう			30	
11	1993		おやつタイムづくり名人になろう			21	
12	1994		お弁当コーディネートの名人になろう			36	
13	1995		お弁当で、すてきにプレゼントを	25			
14	1996		お弁当でダイエット	26			
15	1997		お弁当ダイエット法で食事づくり	18			
16	1999	だんご3兄弟・姉妹替え歌コンクール	53				
17	2001	うつくしま未来博「くらしの知恵袋館」 親子食事づくりセミナー	45				
18	2002	わくわく食探検 おやつも食事も自分たちで作っちゃおう!	33				
19	2003	朝食づくりの名人になろう 家族の分も、おまかせ!	34				
20	2004	「ぴったり弁当」わくわく食探検隊!	27				
21	2005	「ぴったり弁当」を見つけよう!	23				
22	2006	メジャコンといっしょ 楽しい3・1・2弁当箱法	28				
23	2007	ハートを食事でプレゼント!	11				
24	2008	ハートを食事でプレゼント! Part2	18				

\* 参加者数は児童数、ただし16、17回は家族参加のため成人を含む。

# セミナー」25年間の実践 (表1)

期	プログラムの 主な実践・研究課題	教材の開発と活用	
		食事構成力の形成	食事・料理づくりのスキル形成
第1期	基本プログラムの作成  学習者が自身の食事について基本的な理解をし、それを家族単位で準備し、共食するスキルの形成を目的とするプログラム案を、食生態学の理論をふまえて作成し、その実行可能性の検討	<p>疑似家族での実践による学び</p> <p>「3・1・2弁当箱法」の仮説の設定と弁当の分析による検討</p> <p>異なるライフステージの学習者、プログラムによる仮説の妥当性の検討</p>	<p>既存の料理カードの改善・活用</p> <p>料理選択型栄養・食教育を枠組みとする食事づくりのキーとなる料理、30料理の選定</p> <p>30料理についてスキル形成に必要な基本情報の検討</p>
第2期	基本プログラムの展開期I 「自分にとってぴったりの食事づくり」  第1期での成果をふまえて、学習者が自分たちが抱えている日常の課題解決を試みる食事づくりのスキル形成を目的とするプログラム案の実行可能性の検討	<p>学習成果を基に地域の人々との交流による双方向の学び</p> <p>ポーションサイズがひと目でわかる実物大料理カード</p>	<p>食事・料理づくりカードの作成</p> <p>食事づくりをシステムとしてとらえる「Cカード」の作成</p>
第3期	基本プログラムの展開期II 「身近な人へのぴったりの食事づくり」  第2期での成果をふまえて、学習者達がセミナーの学習でお世話になっている人など、自分以外の人々の心身のニーズに合わせた食事づくりのスキル形成を目的とするプログラム案の実行可能性の検討	<p>弁当箱法の5つのルール化を図った実物大弁当料理カード</p> <p>QOLや健康向上の成果に基づく「3・1・2弁当箱法」の本</p>	<p>地域の人々、関連機関との協働による学び</p> <p>弁当箱法に基づく弁当箱</p> <p>弁当箱法のキャラクター(メジャコン)の歌(DVD)</p>
第4期	基本プログラムの展開期III 「地域の人々への共食の輪を広げる食事づくり」  第3期での成果をふまえて、高齢者なども含めて地域で暮らすいろいろな人々の心身のニーズに合わせた食事づくりのスキル形成を目的とするプログラム案の実行可能性の検討	<p>地域の人々、関連機関との協働による学び</p> <p>要介護の人々(異世代)</p>	<p>料理の選択法の検討</p> <p>地域自給率の視点を加えた</p>

## セミナーにおける食教育プログラム開発の変遷

### はじめに

ここでは、25年間のセミナーの食育プログラムについて、p22～23の年表に示した内容を基に、開発の経緯と特徴を探る視点から区分した4期に沿って、その変遷を述べる。

### 第1期：基本プログラムの作成<1983～1986年>

第1期は、食生態学の理論をふまえて、学習者自身が、自分の食事について理解をし、それを家族単位で準備し、共食するスキルの形成を目的とするプログラム案を作成し、その実効可能性の検討をした。具体的には「自然から食卓まで子ども自身が構想し実践する食事づくりセミナー」食教育プログラムの開発という、大きな夢を掲げて、その後のプログラム開発の基盤となる食教育プログラム(以下、基本プログラム)を作成した。この期は、まずは学習者(参加者)のニーズに対応することを主にして、試行錯誤の中でプログラムを修正しつつ進めた。

学習者は、小学4年生から高校生まで、校種を越える異年齢で構成した。また、学習者のグループは、学習者5名と学習支援者(お父さん、お母さん役としてのスタッフ)で構成し、〇〇家族と命名した模擬家族を設け、学習者間での学びあいの場とした。なお、これらの模擬家族による学習環境の設定は、p20のねらいの(7)にあたる“生活実験”でもある。

食事づくり学習は、午前に理論学習をし、学習者自身の食事についての理解を深め、食事の構成力の形成を図った。それを基に、朝食、昼食(弁当)や夕食づくり、食卓づくりを通して、基本的な知識を学びつつ、食事を準備し、楽しい食卓をつくる(模擬家族と共食)スキルの形成を図った。食事の構成の基本的な理解を深める方法は、主食・主菜・副菜とその組み合わせによる料理選択型栄養・食教育の枠組を用いた。しかしながら、学習者が持参した弁当箱の大きさが年齢や体格と著しく違っている等、成長期にある小・中・高校生の学習者に、栄養等のニーズに合ったその適量と、主

食・主菜・副菜のバランスだけでなく、1食の全体量の学習が必要となり、「3・1・2弁当箱法」の理論と実践研究の動機の一つになった。現実の弁当の栄養量や料理構成等の解析をする一方、栄養学の知見を活用して、セミナーで取り上げる基本的な料理とその組み合わせに基づき、弁当を試作した。それらの結果を基に、容量とエネルギー量との関係、主食3：主菜1：副菜2の表面積比による料理のつめ方をほぼ決定し、「3・1・2弁当箱法」の実践的な検証を行った。

一方、p20の(3)に基づき、食事づくりの手順についての教材である。セミナー当初は調理時間を軸にした故上田フサ女子栄養大学名誉教授の「基本料理カード」を改善・活用して作成した食事・料理づくりカードを用いた。食事づくりのキーとなる料理は、日本人の食習慣を考慮し、30料理を選定した。

### 第2期：基本プログラムの展開期I(自分にぴったりの食事づくり)<1987～1993年>

第2期では、前期での成果をふまえて、学習者が抱えている日常の課題を解決するための食事づくりのスキル形成を目的とするプログラム案の検討を行った。

主な食事づくりのスキル形成のねらいはサブテーマにみられる。例えば、“丸ごと食の名人になろう”では、鶏や魚等、丸ごとを扱う機会が減少してきている現状をふまえて、養鶏の専門家による鶏の解体を観察し、生物である食物の丸ごとの大切さや味わいを知り、積極的に丸ごとの食物を活用すること等をねらいとした。これらのプログラムを実施するために、学習支援スタッフとして地域関連職種の専門家の方々に協力を得た。その学習方法は、p20の(5)にある、地域の食や生活文化のベテラン・専門家から直接学ぶ、であった。一方、学習者がその成果として整えた会食に招待をする等、地域の人々との双方向的な交流が第2期では深められ、その効果が確認できた。これらはp20の(1)の“自然から食卓まで”の食の全体像を育てる、ことにつながるもので、プログラムの新たな展開へのス



トップとなった。

また、食事づくりの手順については、学習者の個人個人のスキル形成・向上のために、既習者には、(前日に練習をして)朝食づくりの示演者になってもらい、上手になった充実感から繰り返し学習することの意義の理解を、初めての学習者には学習モデルが描けるように図った。そのために、30料理については、学習者のスキル形成に必要な基本的な情報を検討し、食事・料理づくりカードの充実を図った。合わせて、カードにはスキル習熟度のチェック欄を設け、一人ひとりの学習者のスキル習得を支援した。

なお、弁当箱法の理論は、セミナーでの実践的な検証に合わせ、1986年以降、中・高年のセミナーでも多様な料理での仮説の検証が進み、科学的根拠が確立しつつあった。

### 第3期：基本プログラムの展開期Ⅱ(身近な人にぴったりの食事づくり) <1994~2003年>

第3期は、前期での成果を踏まえて、学習者がセミナーでお世話になっている人など、自分以外の人々の心身のニーズに合わせた食事づくりのスキル形成を目的とした。例えば、そのプロセスは“お弁当で、すてきにプレゼント”では、学習者は自身の弁当づくりをマスターした後、地域の方々に弁当をつくる。まず、地域の方々の心身の状態を知るためにインタビューをし、食事を構想し、ネーミングをし、作り方を調べ、食材の発注・買い物をし、料理を作って、弁当をつめ、プレゼント用にラッピング、メッセージを添えプレゼントし、食べていただいて感想を聞く、というものである。このプロセスでは、p20の(2)の自己決定力が養われ、食生活を営む力の形成につながる。

また、学習者のこの一連の学習活動、食事(弁当)づくりのプロセスは、地域の人から学習者に、学習者から学習支援スタッフに、(その逆も)、と予想を超える課題が出され、スクランブルな学びあいにつながった。ここでは、参加者全員が互いに学びあっており、p20の(4)の“学びあい”の具体を見ることができる。なお、1999年からは、2泊3日に短縮した。そこで、少なくなった学習時間を補うために、食事づくりの手順の教材

は、食事づくりのプロセスを図示した料理カード「Cカード」案を作成し、学習支援の充実を図った。

### 第4期：基本プログラムの展開期Ⅲ(地域の人々への共食の輪を広げる食事づくり) <2004年~現在>

第4期は、前期での成果を踏まえて、高齢者も含めて地域で暮らすいろいろな人々の心身のニーズに合わせた食事づくりのスキル形成を目的とした。第3期までに構築してきた基本プログラムが、異なる地域(埼玉県)、異なる施設(高齢者施設)とそのスタッフ(看護、介護等の専門職)、つまり機関連携で実施されることになった。また学習支援スタッフには福祉、医療等の専門職種(看護、介護等)が加わり、学習内容の大きな展開・充実が図られた。また、「子ども自身がリーダーになる」と名称を変更し、従来にも増して子ども(学習者)主体の学びがセミナーのねらいとなった。

共催により、両機関による企画段階から協働・分担等の協議は密になり、プログラムの以下のような展開につながった。学習のねらいは、健康状態の異なる異世代(高齢者を含む)との交流を、食事(弁当)のプレゼントや共食を通して活発にすることで、人間(尊厳)理解と自分の健康づくりやそのための食事も相対化して理解を深めることである。これらの高いハードルは、上記のような機関連携・共催による、学習内容の精選を通して、少しずつ低くなりつつある。また、弁当箱法に基づく弁当箱やDVDの教材・教具が開発されたことも、ハードルを超える力となっている。

(執筆:針谷 順子)

#### 著者略歴

高知大学教育学部教授。専門は、調理教育学、食生態学、栄養学。博士(栄養学)、栄養士。調理教育学の研究・教育の第一線で活躍。食事バランスガイドを策定した「フードガイド(仮称)検討会」委員など、社会的活動も多数。NPO法人 食生態学実践フォーラム副理事長。

# 学習支援体制

## はじめに

本食事づくりセミナー（以下、セミナー）の基本理念「子ども自身が構想し実践する」の実現のためには、この理念を理解し、共により充実、発展させていこうとする学習支援者（以下スタッフ）の存在がなくてはならない。そこで本稿では、セミナーのスタッフに注目し、これまでセミナーを支えてきたスタッフの専門性と専門性を活かした関わり方について報告したい。具体的には、「セミナーの25年間の実践」（p20～21）に基づいて、スタッフの所属、専門性、関わり方を省察することとする。

## セミナーの基盤となる理論とスタッフの構成（図3）

本セミナーは、子ども自身の主体的な実践、しかもその実践は子ども自身だけではなく家族、友人、地域の人々も含めた、人々のQOLを向上させることにつながる実践力を育むことをねらっている。また、このような学習目標を達成するために、セミナーでは食環境との関わりを視野に入れた、栄養教育・食育の定義に基づいた学習の場の提供と食環境づくりの両面から進めることを特徴の一つとしてきている。

図3は足立の食環境の図に基づいたセミナーハウスのある地域の全体像をとらえた概念図である。具体的には、まず子ども自身について、セミナーでは子ども自身が自分らしい食生活を実践できる知識（主食・主菜・副

菜とその組み合わせ、3・1・2弁当箱法等）を学び、食事づくりは楽しい、これなら自分でもできる等の自己効力感を高め、帰宅後も日常生活の中での食事づくりの行動変容、すなわち実践につながるような学習を行動科学の理論モデルもふまえて行うことを示している。こうした学習を、図3右側のフードシステム（食物の生産、加工、流通）と左側食情報システムの各所に位置する多職種のスタッフが実施してきていることを示している。

スタッフは、こうした理論を基に作成したプログラムについて、主として企画立案、実施、評価から担当するもの、主に食情報システムサイドから、あるいは主にフードシステムサイドから支え合う構成となっている。

## セミナーを支える多様な学習支援スタッフ（表2）

スタッフの関わり方と所属・専門性を具体的に表2に整理した。主催の母体となり、セミナー全体の理念や方向性を構築し、実現への企画、実施、評価、スタッフの養成も含めた全体を担うスタッフ、次にその理念を共有し協働（共催、あるいは学習環境の提供等、共にプログラム企画から参画、実現への具体的な提案などに関わる）するスタッフ、そして、その年のテーマや課題に応じて、プログラム実施内容の要請を受ける、あるいは企画や評価の一部にも参画しながら連携・協力するスタッフ等、スタッフの多様な関わりですすめられた。

これらスタッフをセミナー25年間の流れに沿って見てみると、第1期では蔵王の自然の中で食物の生産にふれる機会がほしい、という主催者からの依頼、要請に現地行政や生産者（組織）は応じて対応するという形での関わりであった。第2期では、その年のテーマや課題に対応させながら、野菜や牛乳のみならず豆腐、チーズ、パン等、食物が生産加工される蔵王の食環境を最大限にいかしたプログラムの実現に地域スタッフとの協力体制が深まった。第3期になると、これらのプロセスの中で、蔵王の特徴としてのフードシステム、食情報システムとして何があり、何を提供でき、その結果セミナー参加者の子どもたちに何を伝えることができるのか等につ

図3 自然から食卓まで子ども自身が構想し実践する食事づくりセミナーと地域

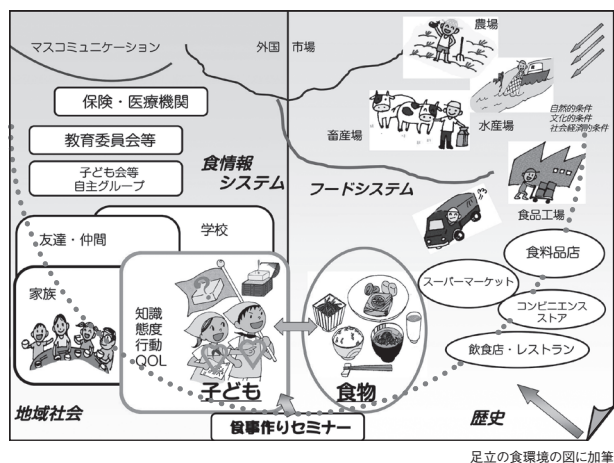


表2 「自然から食卓まで子ども自身が構想し実践する食事づくりセミナー」を支える多様な学習支援者と関わり方

学習支援者の特徴と関わり方				期											
関わり方				開催場所		第1期		第2期		第3期		第4期			
概念図との関係				宮城県蔵王町		宮城県蔵王町		宮城県蔵王町		宮城県蔵王町		埼玉県鶴ヶ島市			
所属				食育の段階		企画・評価	実施	企画・評価	実施	企画・評価	実施	企画・評価	実施		
主催の母体	全体の構想	食生態学実践グループ		専門性・立場		○		○		○		○			
		NPO 法人食生態学実践フォーラム <sup>1)</sup>				/	/	/	/	/	/	/	/		
		食生態学実践グループ、ならびに NPO 法人食生態学実践フォーラム関係所属の学生		大学院生(栄養学、教育学、看護学) 学部学生(栄養学、教育学、看護学)			○	○	○	○	○	○	○	○	
共催(協働)・学習環境の提供	全体構想への協働	セミナーハウス(宮城県蔵王町)		セミナーハウスオーナー		○		○		○		/			
		医療法人健友会みなみかぜ(埼玉県)		医師、看護師、保健師等職員		/	/	/	/	/	/	/	○		
連携	子ども自身	学習者	学習者					○		○		○			
			学習者の家族や仲間							○		○(事後報告会)			
	主に「食情報システム」	機 教 育	小・中学校		教諭、養護教諭			○		○		○			
			高等学校		教諭、養護教諭・家庭科教諭			○		○		○			
		行政関係	関東	保健所・保健センター		管理栄養士		○	○	○	○	○	○	○	
				福祉施設		管理栄養士、栄養士			○		○		○		○
			医療施設		医師、看護師									○	○
			現地行政等	農業改良普及所		農業改良普及員			○		○		/	/	/
				町村役場		農林課担当者		/	/	/	/	/	○	○	/
						厚生課担当者					○		○		
				民生部担当者			○		○		○				
				広報課担当者								○			
	医療施設		医師、看護師			○		○		○		○			
	地域産業の専門家		そばづくり、ちまきづくり、豆腐づくり等		こけしづくり			○		○		○			
	地元グループ		婦人会会員		知的障害者支援施設担当者					○		○			
			食と健康の会				/	/	/	/	/	/	○		
	マスコミ	新聞社	新聞記者					○		○		○			
		出版社	記者、編集者							○		○			
主に「フードシステム」	生産	農業		農業経営者、農業者(田畑果樹園)						○	○		○		
		酪農		牧場経営者			○		○		○	/	/		
		JA		JA組合員						○	○				
	加工流通関係	チーズ工場		工場経営者			○		○		○	/	/		
		JA		集荷場責任者							○				
食料品店		店主							○		○				

1) 第2期までの主の主催者で2003年に結成し、それ以降の主催者  
注: 表中の/は、該当年次や開催地域の特徴において、直接的な関わりがなかった機関等を示している。

いて議論されるなど双方向の連携体制がすすめられた。そして地域(蔵王)の多様な専門性をもったスタッフと主催者として企画立案するスタッフとの間に、セミナーの理念を共有し、そこに互いの特徴を大切にしたい、十分に活かしたい信頼関係やあたたかな協働関係が構築されていった。

一方、第4期になると、高齢者施設という学習環境が得られることとなり、新たに福祉・健康・医療関係者との協働関係が始まった。そして、こうした学習環境やスタッフの協働は、これらを活かした食教育プログラム(お年寄りに弁当をプレゼントする)への展開につながっている。

まとめ

セミナー25年間のセミナーにおける多職種によるス

タッフとの関わりは、「生産から食卓まで」の食環境の全体を視野にいたした食教育プログラムを構築したいというセミナー当初からの願いを実現しようと試みてきた結果である。一方、多様なスタッフによる協働は、関わる専門家の各専門性が問われることになり、今、改めて自分たち自身の研鑽が必要となる。

(執筆: 吉岡 有紀子)

著者略歴

相模女子大学・大学院准教授。専門は、栄養教育、食育。博士(栄養学)、管理栄養士。管理栄養士養成、栄養教諭養成、神奈川県、相模原市等の食育推進に関わる。NPO法人食生態学実践フォーラム理事。

# 学習者(児童)からの発信

## はじめに

「学習者(児童)からの発信」は、セミナー開始時からの基本理念である、子どもの主体的な学びの成果として、セミナー後、セミナーの学習内容が家庭や友だちに発信されることをさしている。

本稿では、セミナーの学習者(児童)が、セミナー終了後、家族、友人、地域の人々などにセミナーの学習内容を伝える行動(以下、発信行動)に展開していくプロセスについて報告し、今後の課題を整理したい。具体的には、第18回「わくわく食体験—おやつも食事も自分たちで作っちゃおう!」プログラム(2002)(以下、本セミナー)に参加した児童のセミナー後の発信行動を事例として取り上げる。

## 学習プログラム(表3)

2002年8月初旬、2泊3日で、宮城県蔵王町にある食生態学実践セミナーハウスでプログラムを実施した。学習者が児童館に通う児童であったことから、児童の学習ニーズやライフスタイルに対応させて、主な内容を食事(弁当を含む)とおやつとしたプログラムを作成した。なお、表3は参加児童用のもので、学習支援者ならびに専

門家研修(多職種複合研修)用には学習支援について記したものを別途準備した。

学習の過程は、楽しく、かつ学習意欲が高まるように、①日常の食事の量や嗜好等の課題をセルフチェック、②課題解決のための理論や実践のための学習、③②の学習を具現化するための実習(食事づくり)を4回(朝食・夕食各2回)で構成した。

参加者は仙台市内H児童館に所属する小学1年生から6年生までの男女計33名である。なお、プログラムの評価は1年生を除く28名で実施した。また、H児童館に通う児童の保護者会のメンバー2名(1名は児童厚生員有資格者、1名は地域のボランティア活動歴あり)。以下、児童館保護者スタッフ)が児童と共に参加した。これらの児童館保護者スタッフは、児童の日常の様子を知っていることから、セミナーでは生活支援を担当してもらうこととした。これにより、学習支援担当と互いの専門性を生かした役割分担ができた。

## プログラムの楽しさについての児童の評価

プログラム内容について、本セミナー後に参加者や家族が記した感想文に「楽しかった」という記述がみられ

表3 「わくわく食探検 — おやつも食事もつくっちゃおう!」プログラム

	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21時
1日目	9:00 → 現 バス				どんなことが好き? わくわくするの? 事前チェック 班編成	料理を選んで 食事を整える (バイキング) 食事のセルフチェック おいしかったか ちょうどよかったか			おやつってなんだろう? わくわくおやつはどうやって作るの? 開講式: 本セミナーの 目的・目標について 1. 目的・目標についての講義 (30分間) 2. おやつで自己表現・自己紹介	食事 構成 法の 基礎 理論	夕食づくり 得意料理を 分担して 食事づくり	ゆっくりタイム 入浴, 明朝の準備等				
2日目	起床・身 支度 みんなでき れいにしよ う!	朝食づくり 家族の分 まで作っ ちゃおう!	自由時 間	ぴったり食 事って何 だろう? (からだに ぴったり 弁当箱法 を生か して)	食事探 検 食事とお やつ のとり 方を セル フチ ェック	弁当を作 ろう (主食3: 主菜1: 副菜2) 弁当で食 事をチ ェック 食事構 成法の 理論を 知る		自由時 間	ルールを生 かした、 くらし にもび つた りの食 事づ くり はお もし ろい?	身近な食 材を 工夫 して おやつ を作 ろう	夕食づく り 友達 にも 教え て あげ よう	食事 構成 法の 基礎 理論	ゆっくりタイム 入浴, 明朝の準備等			
3日目	起床・身 支度	朝食づくり 家族の分 まで作っ ちゃおう!	自由時 間	みんなで 作って いっし よに食 事を する のは もっ と楽 しい! 食卓を 整えて パー ティー しよ う!	自分で 弁当を 作ろう スタッ フの分 も作 ろう 楽しい 会食 (食べ 方、 供し 方を 知り) 食事 づく り 計画 、作 成、 (プレ ゼン ト)、 評 価			帰り 支 度	閉講 式 おやつ で ・セ ミ ナ ー の 感 想 事後 チ ェ ック	現 15:00 → バス						

スタッフミー  
ティング



た参加児童は22名(78.6%)であった。

### 本セミナー後の発信行動(表4)

セミナー後の児童の発信行動について、発信先(家族、友人、地域の人々)と発信内容を表4に示した。なお、発信内容は食事づくり行動の概念図を踏まえて、食事を構想することと構想した食事を具現化することの2側面から表した。

#### (1) 本セミナー4ヶ月後

望ましい食事を構想することについては、セミナーで学習した主食・主菜・副菜とその組み合わせ、料理・食事の作り方、3・1・2弁当箱法(以下、弁当箱法)等を家族や友人に伝えていた。また、食事を実際に作ることにについては、家族の料理・食事づくりを手伝ったり、食卓に食器や箸を並べたり等、セミナーでの食事づくり体験が家族との食事づくりにつながっていた。

また、料理の作り方を家族や友達に伝える情報発信と他の項目との相関をみると、「テキストで作り方を見たことがあった」、「作ることに参加したことがあった」、「ひとりで作ったことがあった」、「作って、家族や友達にごちそうしたことがあった」項目とも有意な関連がみられた。情報発信に関わる上記5項目についての重回帰分析では、「作って、家族や友達にごちそうしたことがあった」という項目が抽出された。

本セミナーにおける食事量と栄養バランスについての

学習の枠組みである主食・主菜・副菜の知識の定着をみると、正解率が7割以上の児童は17名(60.7%)であった。

#### (2) 本セミナー2年後以降

上記の4ヶ月後調査以降、参加児童と直接の関係をとることはなかった。しかし、2004年8月、参加児童のIさん(5年生女子・セミナー当時3年生)が本セミナーで学習した弁当箱法を友人に伝えたいとフェルトで料理教材を作り、「遊んで覚える弁当箱法」を開発したことを筆者に伝えてきた。その後、2005年4月に放課後の児童の居場所づくり事業(文部科学省)として、H児童館に隣接するH小学校の空き教室に地域子供教室「夢工房」が設けられ、その中心的な運営スタッフに本セミナーの児童館保護者スタッフの方々があたることとなった。これを機に、Iさんは蔵王セミナー参加者4名と友だちに声をかけ、弁当箱法を伝える有志のグループ「べんとうず」8名を結成した。そして、「夢工房」を活動の拠点として、放課後「遊んで覚える弁当箱法」の活動を始めた。

「べんとうず」は8月には弁当箱セミナーを自分たちで企画・運営し、10月には地域の食育イベントに参加する等、本セミナーで学習した弁当箱法を自分たちの方法(遊んで覚える弁当箱法)で、校内の友人から地域の人々へと発信していった。

2005年4月から10月までの活動について、ビデオ記録及びインタビュー調査から、本セミナーへの参加との関連をみたところ、Iさんは「私は、3年生の時、蔵王セミナー

表4 セミナー後の学習内容の発信行動

発信内容	発信先		
	家族	友人	地域の人々
<b>食事を構想する</b> 食材 核料理 食事の料理構成 弁当箱法等の情報	料理の作り方を伝える(57%) 弁当箱法を伝える(46%)	弁当箱法を伝える(21%) 弁当のメニューを話し合う(21%)	食育イベントに参加する(21%)
<b>食事を具現化する</b> 食材入手 料理作り 食事作り 食卓作り 片付け 保存等の情報	料理・食事作りを手伝う(89%) 食卓に食器や箸を並べたり片付ける(61%)	食材の買い物を話し合う(21%) 料理作りをする(21%) 弁当をつめる(21%)	スーパーの人に食材について聞く(21%) 作った弁当を地域で食べる(21%)

カッコ内はセミナー参加児童(28名)中、各発信行動を行った者の割合

に参加し、「お弁当箱ダイエット」という、バランスの良い食事の方法を知りました。家に帰ってから、弁当を詰めたりました。弁当を気にするようになったら、友達のお弁当が気になりだしました。主菜ばかりの人、ごはんと焼きそばの主食の組み合わせの人もいました。みんなのお弁当をどうにかできないかなあと考え、フェルトでおかずを作ったら、説明しやすいんじゃないかと思いました」と話していた。また、Tさん(5年生男子、セミナー当時2年生)は夏休みに弁当箱法のセミナーを企画したことについて、「普段はできないけど、蔵王セミナーのように本物の料理を使ってやってみたい。料理づくりは蔵王でやったし、自分たちでできるから大丈夫」と仲間を誘っていた。このように、本セミナーでの学習体験が参加した児童のその後の家庭、学校、地域での発信行動につながっていた。

これらの活動の支援は、弁当箱法等の学習支援を筆者や筆者のゼミ学生(管理栄養士養成課程)などの食を専門とする者が担当し、一人ひとりの子どもへの丁寧な支援を「夢工房」スタッフ(児童厚生員や地域活動の経験者、社会教育を専門とする大学生等)が担当するというように、互いの専門性を活かした協働である。

## まとめ

本稿ではセミナーの学習者(児童)が、セミナー終了後、家族、友人、地域の人々などにセミナーの学習内容を伝えていくことを報告した。セミナーの4ヶ月後の発信行動をみると、食事の構想から実際の食事作りまでの多様な食事づくり行動を介しての発信がなされていた。これらは本事例だけでなく、他のプログラムにおいても確認されている。また、それらの発信行動の背景には、セミナーでの学習が楽しかったという想いと学習内容(主菜・主菜・副菜とその組み合わせ、弁当箱法)の理解の定着が関連していると考えられた。

また、セミナー後数年(2年)を経てからも、セミナーでの学習が深く心に残り、情報発信につながる事例をIさんらにみた。Iさんはセミナーで学んだ弁当箱法を周囲の友だちに楽しく伝えるための「発信の方法」を開発するに至っている。また、Iさん個人の発信行動は集団の活動に発展し、活動の場も学校から地域に広がっている。これらの学習者(児童)からの発信活動には、セミナーの基本理念である、子どもの主体的な学びを育むことを共

有する支援スタッフの存在が重要であると考えられた。

(執筆：平本 福子)

## 著者略歴

宮城学院女子大学教授。専門は調理教育。博士(栄養学)、管理栄養士。管理栄養士養成課程の大学生や、子どもの調理教育に関わる。NPO法人 食生態学実践フォーラム理事。

## 実践報告(p22~30)に関する参考文献

- 1) 足立己幸、針谷順子:自然から食卓まで子ども自身が構想し、実践する食事づくりセミナー、食糧振興会叢書一食生活と食文化10、全国食糧振興会(1985)
- 2) 針谷順子、足立己幸:栄養教育と疾病予防、自分の身体に合った弁当を作るセミナーからの問題提起、学校保健研究、127(1)、470-475(1985)
- 3) 足立己幸:食生活論、医歯薬出版(1987)
- 4) 足立己幸、針谷順子、尾岸恵三子、高橋千恵子:「自然から食卓まで子ども自身が構想し、実践する食事づくりセミナー」のプログラム開発、第2回日本健康教育学会講演要旨52-53(1992)
- 5) 足立己幸、伊藤央子:21世紀へ家庭科からのメッセージ、学校給食1月号から12月号(1993)
- 6) 足立己幸:食事づくり教育にこめる生活文化の視点—生命と文化の接合部そのものとしての食事、講座生活学5生活文化論(足立己幸、寺出浩司編著)122-146p、光生館(1995)
- 7) 足立己幸:栄養指導から食の学習・食環境づくりへ—国内外の多様な実践に学ぶ、食と教育(江原洵子編)158-182p、ドメス出版、(2001)
- 8) 針谷順子、平本福子、足立己幸:わくわく食探検(宿泊タイプ)プログラムの開発と評価、平成14年度児童環境づくり等総合調査研究事業地域で支える児童参加型食育プログラムの開発に関する研究報告書、18-38(2002)
- 9) 足立己幸、針谷順子:3・1・2弁当箱ダイエット法、群羊社(2004)
- 10) 吉岡有紀子、高増雅子、足立己幸:学童保育所における「わくわく食探検」プログラムの開発と評価、小児保健研究、63、524-534(2004)
- 11) 足立己幸、吉岡有紀子:地域・くらしに根ざした「食」育のキーパーソン、保健の科学、48.10.729-734(2006)
- 12) 平本福子、針谷順子、足立己幸:児童参加型食教育プログラム「わくわく食探検」の開発と評価—仙台市H児童館の事例一、小児保健研究、66.757-766(2007)
- 13) 足立己幸:「食」育は子どもから家庭へ、学校へ、地域へ発信、日本健康教育学会誌、15.4.237-244(2007)
- 14) 平本福子:子どもから子どもへ、地域へ発信する食教育—仙台市地域子供教室夢工房「べんとうず」の事例一、第43回宮城県栄養改善学会講演集、10-11(2008)
- 15) 足立己幸:創刊にあたって、食生態学—実践と理論、1、2-5(2008)

## ■ 編集後記

発題論文とそれをめぐる意見や討論は、本誌の特徴とするところです。今回の発題論文「食育ネットワーク形成における参加グループの課題共有のプロセス『S食育ネット』の事例」は、「課題共有のプロセス」そのものを研究対象としたところに実践者の視点がみえる論文で、実践と研究をつなぐ意見交換の「種」となりました。

また、教材コーナーの「共食手帳」は、高齢者の食の課題を高齢者自身と支援者が共に取り組むことができる教材として画期的なものです。最後の「自然から食卓まで、子ども自身が構想し、実践する食事づくりセミナー」は、25年間の活動をまとめることを通して、実践と研究をつなぐ方法の事例検討として提起させていただきました。

しかしながら、上記の編集作業を通して、非常に多くの問題をかかえるなか、今、何が最重要かを決める力が弱いという、自分たちの力不足も突きつけられた。

## ■ 編集顧問

\*五十音順

坪野吉孝

東北大学大学院法学系研究科教授。専門は健康政策・公衆衛生学。

中島正道

日本大学生物資源科学部教授。専門は食品経済学。

二見大介

社団法人日本栄養士会参与。専門は公衆栄養学。

## ■ 編集委員

足立己幸 針谷順子 平本福子

食生態学—実践と研究 —Ecology of Human and Food :Practice and Theory Vol.2

2009年3月31日発行

発行者：特定非営利活動法人 食生態学実践フォーラム 理事長 足立己幸

## ■ NPO法人 食生態学実践フォーラムの活動

### □ 2008年度の主な活動

1. 食生態学や関連する分野の調査・研究事業  
— 公開研究会:「3・1・2弁当箱法」の糖尿病予防・治療への展開
2. 栄養・食を支える専門家の質を高める研修事業  
— 全国各地(東京・名古屋・高知・仙台)での研修会  
— 食育プロモーター養成講座  
— 食生態学連続講座「看護師と管理栄養士・栄養士のコラボレーション 病気がある人の食べる・生きる、生活過程を整えるとは」  
— 開発途上国の栄養・食生活改善等の専門家を学習者とするJICA等の日本での研修のうち、栄養・食に関する研修の計画・実施・評価。青年海外協力隊栄養士隊員の派遣前専門研修
3. 食生態学や関連する分野に関するプログラム・教材開発事業  
— 「共食手帳」専門サポーター研修の企画・実施・評価
4. 食育セミナー事業  
— 子ども自身がリーダーになる食育セミナー「ハートを食事でプレゼント」
5. 食生態学や関連する分野の情報発信事業  
— HP、会報による情報発信  
— 機関誌「食生態学—実践と研究」の発刊

### □ 会費(年額)

正会員20,000円 賛助会員5,000円 学生会員3,000円 法人会員50,000円(一口)

入会等の申し込みについては、<http://www.shokuseitaigaku.com/>、tel&fax:03-5925-3780までご連絡ください。

# NPO法人 食生態学実践フォーラム 設立趣旨

1992年の「世界栄養宣言」で世界的なコンセンサスを得ているように、今、世界中で8億人以上の人々が飢餓等の原因による栄養不良状態にあります。地球全体で食料は量的には足りていますが、さまざまなレベルでの分配が悪く、栄養学的に望まれる安全な食物へのアクセスは不平等です。こうした不平等をもたらす自然的・社会的条件は、抜本的に改善されなければなりません。

また、日本は市場等見かけは飽食ですが、個々人の食事は質・量が十分でない人が多く、その結果、心身両面で健康や生活上の問題を抱える人が多くなっています。

これまで、私たちは「食生態学実践グループ」として、食生態学の研究成果をふまえて、“子どもから高齢者まで、地球上に生活する全ての人々が、人間らしい食生活を営むことができるように、そうしたことが実現できる地域・社会であるように”と願って活動を続けてきました。

「食生態学」は1970年代の初めから、現場での栄養活動に行き詰まった人々からの強い要請を受けて生まれた、人間の食をめぐる新しい学問です。“生活実験や地域実験法を活用して、さまざまな地域で生活する人々の食の営みについて、環境との関わりで構造的に明かにし、更に、人々や社会・環境への適応法則性を解明すること”をねらって進められ、かなりの実績を積み重ねてきました。そして近年では、食をめぐるさまざまな課題の解決に活用できるようになってきました。

こうした願いをもっと着実に実現したい！もっと多くの人々と共有したいと、私たちが結論としたものは、食を支える専門分野の人々やその活動に対し、食生態学や関連分野の研究・実践の成果を踏まえて支援する「特定非営利活動法人 食生態学実践フォーラム」の設立です。

近年、日本では食の重要性が強ク言われ、「健康づくり・ヘルスプロモーションと福祉分野」「生きる力の形成を生涯を通

してねらう教育分野」「食と農・フードシステムの両面からの調和と向上をねらう食料生産分野」など、多様なアプローチを多様な専門家によって進められるようになりました。いずれの分野も、取り上げる課題についての正しい理解、科学的な根拠と有効な方法についての知識・態度・スキル・価値観等が必要になります。しかも、その課題に対する解決は、人々がそれぞれの生活や人生をより充実でき、社会的貢献につながる、その人にとって楽しい、望ましい方向でなければなりません。

「特定非営利活動法人 食生態学実践フォーラム」の設立が必要なのは、これらの課題に十分な科学的な根拠を踏まえて、専門家とそれにかかわる人々とは連帯して取り組まなければならないからです。

食生態学や関連する分野の調査・研究

栄養・食を支える専門家の質を高める研修

食生態学や関連する分野のプログラム・教材開発

自然から食卓まで子ども自身が構想し実践する食育セミナー（食育とは、一人一人にとって生きがいのある健康な生活ができるような食生活を営む力を育てること、そうしたことが実践できる社会を育てることである）

情報発信等の事業

を行い、“子どもから高齢者まで、地球上に生活する全ての人々が、人間らしい食生活を営むことができるように”広く公益に寄与していきたいと切望いたします。

食は、本来、身体的にも精神的にも社会的にも、次の活力の再生産の源、いわば健康の資源であり、人間らしい生活・生きがいの資源です。私たちが活動法人として願うのは、まさにこうした人間らしい食、それを支える社会・環境の復権です。

(2003.4.9設立)

## 事業内容

- (1) 食生態学や関連する分野の調査・研究事業
- (2) 栄養・食を支える専門家の質を高める研修事業
- (3) 食生態学や関連する分野に関するプログラム・教材開発事業
- (4) 食育セミナー事業
- (5) 食生態学や関連する分野の情報発信事業

NPO法人 食生態学実践フォーラム 事務局

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-16-10 コーポ小野202

tel&fax:03-5925-3780

e-mail:forum0314@angel.ocn.ne.jp

http://www.shokuseitaigaku.com/